



特250  
38

十八年十二月

# 現代の戦争と國民の覺悟

(非賣品)

東京都麴町區大手町二丁目二番地

社人團 大日本國防義會

電話丸ノ内四六六〇一番

# 始



目次

- 一、大日本國防義會設立趣意
- 一、現代の戦争と國民の覺悟 陸軍大將 吉田 豊彦 (一)
- 一、制空と戦勝 海軍中將 安東 昌喬 (四〇)
- 一、本會報告
- 一、本會定款及役員

特 250  
38

大日本國防義會設立趣意

凡ソ國防ハ一國國命ノ繫ル所ナリ、軍備ノ事一日モ國民ノ腦裏ヲ去ルベカラズ、況ンヤ單ニ經費ノ一事ヲ以テスルモ、宇内列強皆共ニ國家歳出ノ主要部ヲ占ムルヲ例トシ、棟樑ノ當否、施設ノ得失、直ニ國家ノ生存力及ビ發展力ニ影響シ、延テ盛衰興亡ノ勢ヲ成ス、彼ノ列強ノ國、官民ノ間、各種調査研究ノ機關アリ、思フ國防ニ潜メ意ヲ軍備ニ致シ、精査深究倦ムヲ知ラザルモノ洵ニ以ヘアリ、云フニシテ、我國民ノ國防軍備ニ於ケル、留心敢テ切ナラズトセズト難モ、惜ムラクハ意ヲ用キテ未ダ周到ナラズ、國防方針ノ事、國力調節ノ事ト、動員用兵ノ事、作戰計畫ノ事トヲ問ハズ、苟モ軍事ニ關スルモノハ、大小一併、舉グテ専門軍人ノ一手ニ放委シ、復タ多ク省ミザルノ風ナシトセズ、因習ノ然ラシムル所ト謂フト唯モ、抑亦一般軍事思想ノ未ダ發達セザルニ職由スルナシトセンヤ、開國進取ノ洪謨ヲ奉體シテ、益々國家ノ隆昌ヲ希圖スル國民ヲ以テシテ、將タ世界ノ均勢ニ伍シ、東洋ノ平和ニ任シ、地位ヤ、責任ヤ、愈々高且大ヲ加フル帝國ノ國民タルヲ以テシテ、其ノ今日ニ至ルマデ國防軍備ノ上ニ於テ、未ダ一個調査研究ノ機關ダモ之ヲ有セズト云フ、豈ニ寔ニ憾ムベキノ事態ニアラズヤ。



或ハ曰ク國防ハ軍國ノ樞機ナリ、妄ニ門外漢ノ容喙ヲ許ス可カラズト、然レドモ凡ソ軍事上機密ノ性質ヲ帶ブルモノハ、動員命令、作戰計畫等ノ數項ニ過ギズシテ、寧ロ其ノ根本義トモ言フベキ國家防衛ノ大方針、軍備ト國家經濟トノ關係、軍備ト外交トノ關係、軍備ト國力發展トノ關係、軍備ト移民拓地トノ關係、軍備ト通商貿易トノ關係、軍備ト殖産興業トノ關係、軍備ト國民教育トノ關係等ニ至ツテハ、廣ク一般有識者ノ調査研究ニ俟タザルベカラザルモノ多キニアラズヤ、之ヲ奈何ゾ軍國ノ樞機、國民ヲシテ干知セシム可カラズトセンヤ。

要之、軍備ヲ計畫シ、用兵作戰ノ事ニ任ズルハ、素ヨリ専門軍人ノ職責ニシテ、敢テ一般國民ノ干與ヲ容サズト雖モ、廣ク國家防衛ニ關スル方針施設以下、各般ノ要事ニ涉リテ調査シ、研究シ、以テ其ノ根本基礎ノ立定ニ啓沃スルハ、正ニ吾人國民ノ任務タルベキヲ信ズ、而シテ一般軍事思想ノ發達ニ裨益スルノ道、亦之ヲ措テ他ナキヲ思フ。

如上ノ趣旨ニ基キ、吾人同志相集ツテ、茲ニ大日本國防義會ヲ組織ス、冀クハ大方諸賢ノ贊同ト協力トニ依リ、此ノ事業ノ大成ヲ得ンコトヲ。

大正元年十月設立準備會ニ於テ

大日本國防義會發起人

## 講演

### 現代の戦争と國民の覺悟

(於本會講演)

陸軍大將 吉田 豊彦

私が只今御紹介を受けました吉田でございます。本日この會で何か話をせよといふ御依頼がございました。ところが私は既に七十一歳の隠居の老兵でありまして、唯老後の御奉公の爲に、科學技術に關係ある學會や協會などのお世話を致してをるばかりでありまして、第一線に活動してをる者でないのでありますから、別に皆様にお話申上げるやうな有益な資料は持合せないのであります。併し折角の御要望でありますから、平素考へてをりますことを雜談的に申上げて見たいと思ひます。既に御承知の事柄ばかりと存じますが、暫く御辛抱を下さらば光榮の至りであります。

大東亞戦争が始りまして以來、この一年餘の短時日の間に、皇軍の擧げました戦果は未だ曾て世界戦史に類例ない程偉大なものでありまして、英米の東亞侵略の據點を殆ど全部覆滅しまして、作戰の遂行に劃期的進展を見ますと共に、大東亞共榮圈の確立と世界新秩序の建設に堂々たる歩武を進め

つゝあることは、私共國民の感謝感激に堪へない所であります。これ全く大稜威の下、皇軍將兵の忠勇にして義烈、一身一家を忘れ君國に殉ずる精神力の發露であり、周到なる訓練の賜のものであり、作戦の指導が神技に通ずるは勿論であります。他面軍の機械化の進歩に俟つものあるを忘れてはならないのであります。今日までの皇軍の戦果は洵に偉大なものであります。敵は何と申しましたも世界の強國を以て誇る英米であり、傳統的に粘り強さを誇つてをるイギリスであり、比類なき富を豪語してをるアメリカであります。さうして緒戦の大敗を雪辱する日を期してをるのであります。目下着々準備を致してをります。

アメリカは戦時體制への劃期的轉換を強行しまする爲に大重になつてをりますと同時に、その豊富な資源と歴大な生産力を持みまして、反撃の態勢を刻々整備しつゝあります。就中航空力と造船力との飛躍的増強を圖りますと共に、北の方はアラスカ、アリゾナ、ニューメキシコから、ミッドウェイ、ハワイ、サモア、フィジーの大太平洋の島々を経まして、南の方ソロモン、ニューカレドニア、濠洲を繋ぎまする一聯の作戦基地を建設し包圍陣形を立んとしてをるのであります。昨秋以來のソロモン海域の激烈なる戦闘は、この敵の野望的作戦の現はれであると存ぜられます。

アメリカの海軍は皇國海軍の奮戦力闘に依りまして、次々と破摧されました。これが爲に昨年の六月に造艦計畫の根本的編成替を決定しまして、未著工の六萬噸の戦艦五隻の建造を中止し、其代りに

航空母艦、巡洋艦、驅逐艦等の建造に主力を注ぎまして、從來執つてをりました戦闘艦中心主義から航空母艦中心主義に轉じたこと傳へられてをります。

更に最近陸上にあります基地の有利な條件を活用する爲に、陸上基地に重點を置きまして、前に申上げました島々及支那に於ける空軍基地の建設強化を急ぐと共に、我が本土の焦土化戦術を狙つて長距離爆撃機の建設に大重になつてをるさうであります。御承知のやうに昨年の秋濠洲のブリスベーンからアメリカのサンフランシスコまで、一萬二千キロを三十六時間で無著陸の飛行に成功したといふことが傳へられてをります。これは飛行機に詳しい權威者に聽きますと、目下の技術の程度では、戦時武裝を整へてあの飛行は困難であらうが、戦時武裝を省略しまして、油をうんと積んで行けば出來ないことはないといふことであります。兎に角この事は大いに注目すべきことだらうと思ひます。

本年一月初めにルーズヴェルトがアメリカの議會で演説しました中に、「昨年即ち一九四二年に於ける軍用飛行機の生産高は四萬八千臺であつて、十二月中の生産高は五千五百臺に上つた」と言つてをります。又船を造ります造船高は「昨年は一昨年比して二倍半に増加して、造船能力は略々目標の年産八百萬噸に達した」と豪語してをるのであります。これを飛行機に付て見ますと、從來アメリカは概ね一年一萬臺、月約一千臺の生産能力があつたのであります。工場の擴張、轉換等に依りま

して逐次にその製造力を増して行きまして、昨年の十月には大體昨年の目標である月産五千臺、即ち年産六萬臺の豫定の月割高に到達した模様でありますから、昨年の製造高が最小限四萬臺以上であることは確實であるといふことが推定出来るのであります。

即ち彼は生産力の増大のみを誇りまして、言葉を換へていへば、物の力に依つて我を威壓せんと企圖してをるやうであります。併し他面錫とかタングステンとか、マンガンとか、ゴム等の主要軍需資源の欠乏は、さう容易く解決せらるべくもないのでありませうし、又勞働力の不足即ち人的資源の動員の前途には或る限度がありますのと、もう一つは戦力は精神力と訓練と用兵と物との四つの綜合に依つて決せられるものでありますから、敢て彼の力を過大視する必要はありませんが、これを大統領の空念佛とのみ過小評價してはならないのであります。唯吾々として最も慎しむべきは、今日までの勝利に酔ふことなく、我國として執るべき方策は、大東亞の建設に依りまして潜在的國力、即ち地中にまだ隠れてをる國力を、現實の國防力に轉換することに全力を盡して、必勝の信念の下に斷乎戦ひ貫くといふことが最も肝要であります。

イギリスの状況は時間の關係上省略しますが、唯こゝで一つ忘れてはならないことがあるのであります。それは吾々大和民族とアングロサクソン民族とは、その性格に於て根本的に相違があるといふ點であります。即ち日本人の性急とは全く正反對のアングロサクソン民族の悠長性と申しますか、

粘著性と申しますか、それを吾々はよく知つて置く必要がある。イギリス人の粘著性と申しますか、頑張り強いことは過去の歴史がこれを示してをるのであります。一七〇〇年代の終から一八〇〇年代の初にかけまして、十數年の間歐洲諸國中唯イギリス一國がナポレオン一世に對抗し續けたことがあります。又此かる古い例を取らずとも、近く一八九九年、却ち今から四十四年前に勃發した出來事であります南阿戰爭に於てもこれを示してをりますし、前の歐洲大戰に於きましても如實にそれを示してをるのであります。

今次の戰爭は政府が聲明されてをります如く、長期に亘る覺悟を以てこれに對處せねばならぬのであります。一「長期戦の勝敗の決は、早く戦に倦いた者が敗ける」といふ一言に盡きるのであります。でありますからこの際吾々は一層敢闘精神を鼓舞し、振作し、獎勵し、激勵しまして、この戰爭が幾年繼續しませうとも、些の倦怠を生ずることなく、必勝を期して奮勵邁進せねばならぬのであります。即ち堅忍持久のマラソン競争に於きましても彼等英米人をして後へに墮若たらしめねばならぬと存じます。

次に稍々數字的に互る嫌ひがありますが、皇軍の今日までの戦勝の結果、アメリカの主要軍需資源に及ぼしてをる一般情勢を窺つて見たいと存するのであります。

その一つはタングステンであります。タングステンは特殊な鋼を造る上に非常に必要な原料であり

ます。其世界生産額は大體戦前三萬八千噸でありました。その中の六割が支那とビルマに産するのであります。このタングステン輸入停止といふことはアメリカに取つて一つの打撃でありませう。今後は南米のボリヴィヤ、アルゼンチンのタングステンに依存すると致しましたが、これ等兩國の産出額を合算しまして、戦前世界生産の一割に過ぎなかつたのであります。尤もこれは極力増産に努めるであります。

もう一つは製鋼用のマンガンであります。鋼を造ります上に必要なマンガン、この問題が可なり重大でありまして、戦前アメリカはインド、南アフリカ、ブラジル、キューバ等から輸入してをりました。マンガン鑛の世界第一の生産地はソ聯でありまして、インドは世界第二の生産地であります。それが船腹の不足と樞軸側の空海軍の活躍に依りまして、幾分かその輸入が困難になつてをる。これは國防上相當の支障を來してをると思はれるのであります。即ちアメリカのマンガン鑛の生産は一九四〇年に四十八萬噸でありました。尤もアメリカのマンガン鑛は多少質が悪いのであります。數量は四十八萬噸でありました。他面インド、南阿、ブラジル、キューバ等から約百三十萬噸のマンガン鑛を輸入してをります。一昨年のアメリカのマンガン鑛の消費高は大體百五十萬噸と見積られてをるのであります。

御承知のやうにゴムの世界産額の大部分は大東亞に産してをります。アメリカは毎年五、六十萬ト

ンをマライと元の蘭印から輸入致してをつたのであります。その輸入量が大體消費額の九割に相當してをるといふことであります。昭和十六年の六月にアメリカはゴムの輸入管理の會社を起しまして多量の見越輸入をしたのであります。併しその輸入しました高が先づ一年半乃至二年分であると傳へられてをります。この重工業に欠くべからざる原料でありますゴムも、南米、主にブラジル、それから西アフリカ、これは主としてベルギー領コンゴであります。これ等から輸入する外に途がなくなくなりました結果、アメリカ政府は昨年の三月末にタイヤの使用統制を實施致してをります。又個人使用の自動車のタイヤを政府が收用することとなりまして、一般に恐慌を來したといふことであります。又デパートとか商店等に於きましては、自動車タイヤの不足の爲に品物の配達を一切断つてをる。牛乳會社の如きもタイヤの保存節約の爲に、隔日に配達するの餘儀なきに至つてをるといふことであります。

一體自動車のタイヤ或はチューヴにゴムをどれだけ使つてをるかと申しますと、一九四〇年のゴム消費額が五十九萬二千噸、約六十萬噸であります。その中八割の四十七萬五千噸が自動車のタイヤ、チューヴに使はれてをるのであります。消費額の第一位を占めてをるのであります。又ゴムの消費節約の趣旨を徹底せしめます爲に、次のやうな宣傳を致してをります。「タイヤ一萬七千本は戦艦一隻に要するゴムの量に等しい。タイヤ七本は爆撃機一機に要するゴムの量に等しい」といふ

やうな宣傳を致してをります。又「從來一年しか保たなかつたタイヤが、スピードを落とすと、詰り時速三十キロを嚴守するならば、二倍の二年の壽命を保たすことが出来る」といふやうなことを頻りに宣傳してをるのであります。

もう一つは錫であります。錫の世界總産額は戦前大體二十萬トンであります。その中の六割強がマライとスマトラに産するのであります。アメリカの年の所要額が平均十萬トンでありましたが、その大部分はマライ、スマトラから輸入されてをつたのであります。これが輸入停止になりますから、一部は南米のボリヴィア或は西アフリカのベルギー領コンゴ等から輸入すると致しましても、到底全需要は充足出来ないものであります。罐詰工業の如き相當の打撃を受けてをると思はれます。一九四〇年に於きまするボリヴィアの錫の生産は三萬八千トンでありました。尤もこれを増産を圖ることは勿論であります。

アメリカが不足資源に惱まされてをりますのは、獨り東亞に生産するものばかりではないのであります。アメリカ自身に多量に生産するものにまで及んでをるのであります。その代表的のものは石油であります。それは石油の生産が減少したといふのでは勿論ないのであります。油槽船の不足と撃沈増加に依る輸送の不圓滑混亂に基くのであります。戦前就航してをりましたタンカーが三百五十艘で二百六十萬噸あつたといふことであります。御承知のやうに一部は戦争の始りにイギリスに貸

してやりました。それに樞軸側の潜水艦の活躍に依りまして、輸送能力が著しく減退致しまして、戦前の五割五分程度に低下してをるといふことであります。それで背に腹は代へられないで、昨年五月十五日からガソリンの割當制を實施致しました。その割當制は最初アメリカの東部諸州のみであつたのであります。十月以降は全國にこれを及ぼしてをるのであります。その制限は從來一ヶ月一臺平均二百五十リットルの消費量でありましたものを、五分の一の一臺平均五十リットルに制限致しました。又自動車の速度が平均、時速四十キロであつたものを三十キロに低下させ、總走行キロメートル、詰り一年間に一臺の自動車の走るキロメートル數を五千キロといふことに定めたのであります。即ち自動車の使用を眞に必要己むをえざる場合に制限したのであります。アメリカが自國に澤山産する石油に付てかういふ困難を醸すといふことは、全く思ひ設けなかつたことであらうと存せられるのであります。

又フィリッピンはアメリカに對しまして二種の戰略資源の供給地でありました。それはマニラ麻と火薬の製造原料である椰子油であります。そこでアメリカは北部ブラジルに椰子の栽培を奨励してをる模様であります。油脂の問題に付きまして、南洋地方の油脂資源は莫大でありまして、戦前大體年産三百八十萬トンでありました。その中の百八十萬トンが先づ現地及其附近で消費され、二百萬トンが輸出可能量であつたのであります。これがヨーロッパ、アメリカ等に輸出をされてをり、日本にも

若干来てをりました。その三百八十萬トンの油の七割がもとの蘭印とフィリッピンで産する。三割がビルママライ、タイ、佛印で産出致してをりました。種類としては椰子油が一番多いのであります。この油脂は御承知のやうにグリセリンと各種の脂肪酸の化合物であります。概ね一割のグリセリンを含有致してをります。椰子油では一割三四分含んでをるのであります。大體平均致しますと一割のグリセリンを含有してをる。この油を分解致しまして採れましたグリセリンが、軍用火薬及び鑛業用爆薬の必須の原料であるのであります。

その外支那からのアンチモニー、もとの蘭印からするキニーネ、フィリッピンからするクローム鑛の如きも不足資源に數へらるべきものと思はれます。

今日までの状況はざつと今申した通りであります。恐らく躍起となつてその補充策、代用策を講じてをるでありませう。併しそれが軌道に乗ります爲には、尠からざる苦心が伴ふものと思はれるのであります。私がアメリカの不足資源のことを稍と詳しくお話申上げましたのは、これが爲に吾々が安心して可なりといふ意味ではないのであります。あの贅澤なアメリカに於ても然りであります。我が方に於きましても今後派生することあるべき幾多の困難を堪へ忍んで、是非ともこれを克服せねばならぬといふ念願に外ならないのであります。

非常に前置が長くなりましたが、さて近代戦の特質は、一言にして言ひ現はしますならば大機甲軍

國に依つては裝甲軍とも申してをります。これは戦車を重點として編成した軍であります。此ことは後で詳しく御話申上げます。大機甲軍と大海軍と大空軍の電撃作戦なりと斷じ得るのであります。而してその一つを欠きましても作戦の成果を十分に發揮し得ない。この度のヨーロッパ戦に於きまして若しイギリス軍が強大な機甲軍を持つてをりましたならば、御承知のダンケルクのあのやうな見苦しい敗戦は見なかつたでありませう。又若しドイツ軍が強大な海軍を擁してをりましたならば、ダンケルクのあの見事な戦勝に次ぎまして直に對英上陸を敢行して、戦局を一舉に決し得たかも知れないのであります。

空軍の卓越せる大威力は滿天下の齊しく認むる所であります。併し海の上の戦は別と致しまして陸戦に於て空軍の威力のみを以て牙城を抜くことの出来ないことは、ロンドンなり重慶なり、既往の實戦の經驗に依つて明かであります。牙城を抜き最後の決を定めるものは地上軍であります。而して地上軍の中で王座を占むるものが機甲軍である。それは恰も獅子が百獸の王でありますと同様に、戦車の進む所、百軍みな懾伏するからであります。併しこの機甲軍の王者の地位も亦空軍の制空權の獲得と地上軍の協力を依つて始めて確保せられるのであります。言葉を換へて申せば、科學の力が軍の脚力を怪力化したといふことが出来るのであります。従來は人の力、馬の力に依つて掣肘されてをりました軍の機動能力が、内燃機關即ち發動機の發達に依りまして、到底過去に於ては企求し得ざる



程度に増大した結果であります。

ここで一寸話が傍道に入りますが、私はよく「兵器と科學の關係」といふことを人から聽かれることがありますので、そのことに付て若干お話し上げて見たいと存じます。敵に直接殺傷の威力を逞しうする兵器、詰り鐵砲とか大砲とか爆薬とかいふものは別と致しまして、その以外のものに於きましては、私は常にかういふ定義を下してをるのであります。即ち科學の力に依つて光の感覺、即ち吾々の肉眼の視力を補強する。科學の力に依つて音の感覺、即ち吾々の耳の聽力を補強するのである。科學の力に依つて神經の傳導、指揮統制の機能を確保する。科學の力に依つて筋肉の能力を怪力化する。かういふやうに定義を附けてをるのであります。

これを過去の歴史に徴しますると、世の進歩に伴ひまして、武力の競争は益々多數の軍隊や澤山の艦隊を要するやうになりました。併し理想としましてはこの多數の軍隊や多數の艦隊を丁度一人の人間のやうに、言葉を換へていへば一人の人間に相似形な「ジャイアント」に造り上げる。斯くの如くにして始めて理想の統制が取れます。さうして科學の力に依つてこの理想的な巨人に眼を造つてやり、耳を造つてやり、頭腦神經を造つてやり、又手足の力を怪力化する。かういふやうに考へられるのであります。

私共の持つてをりますこの眼であります、これは弓矢刀槍時代に相當してをるのであります、

今日のやうに戦闘距離が大となり、戰場が廣範圍となり、又飛行機の出現に依りまして、戰場が立體化しましたのに對して、私共の眼の進歩はこれに伴つてをらない。昔と同じであります。でありますから科學の力に依つて肉眼の力を補強するいろ／＼の光學兵器を要するのであります。最も簡單なのを申しますと、大きなレンズを使つた倍率の大きな望遠鏡の如き、又自分は掩體の後や「トーチカ」の中に隠れてをつて、眼鏡の頭だけ出して何處でも見られる俗にバノラマ眼鏡と言つてをりますが、さういふものゝ如き、潜水艦が使用してをる潜望鏡の如き、又飛行機に對しましては、始終上を見てをるといふことは、人間の首を草臥れさせますから、眼は前方に向けてをりながら何處でも上空を見られるやうな觀測鏡の如きその一例であります。

吾々の眼は暗夜や或は霧の中のものは見えないのであります、これは肉眼の能力が足りないからであります、肉眼に映じまする光は、波長萬分の四から萬分の八までの極く小範圍の光しか感じないのであります。隨つて萬分の四以下、萬分の八以上の波長の光線は幾ら放射されてをりましても、遺憾ながら吾々の眼には光としては感じない。暗闇の晩或は霧の中物の見えないうのは、眼に見えるべき可視光線が途中ですつかり吸収されまして、眼まで來ないからであります、不可視光線たる赤外線などはどん／＼來てをる。でありますから不可視光線である赤外線に依つて化學反應を起すやうな乾板を使ひますれば、寫眞は立派に撮れるのであります。これ等の如きは偵察に使はれるものであ

ります。又暗闇の晩に赤外線で物を照します。さうして暗視望遠鏡と申しまして光電管と螢光板を組合せた暗視望遠鏡で見れば、その物體を見ることが出来ます。詰り眞暗闇で自分は照し出されてをるといふことを感じなくて、赤外線で照されてをって、向ふから暗視望遠鏡で見れば、そのものを見るここが出来るのであります。即ち赤外線で照してをるものを光電管で受けますと、こゝに電子流が出来まして、螢光板でもとの照されてをるものゝ光が映るわけであります。かういふものも兵器として使はれる時代が来ようと思ひます。

私共の耳も眼と大體同様でありまして、戰場が擴大しスピードアップしました今日、頗る不完全であります。人間の耳は人の話を聴き、虫の啼聲を聞き、鳥の囀りを聞いて楽しむやうに神様が造つて呉れたのでありますから、音を集める耳たぶが小さいのであります。又聴神経も大したものではない殊に方向性が悪いのでありまして、ドンといふ音を聴きましてもその音がどの方向から起つたかといふことを判断することがなかく、難しい。到底蝙蝠の聴覚の鋭敏なものには遙かに及ばない。御承知の耳長蝙蝠は盲目でありますが、夏の日の暮れあたりに家の軒の下或は木の間をどん／＼飛んで虫を食つてをります。あれは全く耳の非常に鋭敏なのに原因してをるのであります。

そこで御承知の聴音機でありますが、あの聴音機といふのは極く合理的に設計されました大きな喇叭を四つ著けまして、上下左右に二つづゝ著いてをります。さうして方向性をよくする爲に、人間の耳の間隔より數倍の大きな間隔を置きまして配置がしてある。さうして音の方向を決めますのは、普通の場合に於きましては耳で聴き分ける方式であります。これは上下から来てをります管の先を一人の観測手が兩方の耳に挿んでをる。又左右から出てをります管の先を他の者が兩方の耳に挿んでをりまして、上下左右から入る音が全く同じく感ずるやうな方向に持つて行つて方向を決めるのであります。

ところが人間の耳といふものは右左が全く聴覚が同じであるとは言へない。而も教育も可なり困難であります。音といふものは空氣の震動でありますから、これを機械化することに依りまして、電氣のエネルギーに變へることが出来ます。即ち音の波を電氣の波に變へまして、更にその電波を光に變へますと、音の方向を光として眼で見るといふことになり得る。詰り音を眼で見るといふことなるわけでありまして、これは野戦等に使はれる機械には稍々困難であります。室内等に於て飛行機の方向を知つて、いろ／＼計畫をするといふ用には立派に使はれるのであります。

又近頃のやうに飛行機の速度が非常に早くなりまして、音で聴き分けて方向を決めるといふことは不便となりますので、この頃では超短波を發してそれで飛行機を發見するといふ所謂電波標定機といふものが、歐洲戦で頻りに使はれてをるのであります。詰り超短波を出しまして、その短波に依つて飛行機を探しまして、二ヶ所からこれを交會させて方向を決めたならば、飛行基地に命令を下して、

戦闘機を飛出させるといふこともやれるのであります。

又近頃の砲兵は損害を避けず爲めに多く隠蔽陣地を取ります。詰り山の後などに陣地を敷きまして、敵に見えないやうにして射撃をする。この位置を発見することはなかなか困難であります。そこで近頃では發射音、詰りドンといふ音を標定しまして、大體その音の出た音源の位置を決めるといふ音源標定機といふのが出来てをります。この音源標定機の原理は簡單でありまして、二キロか三キロ隔つた所に「マイクロフォン」を据えて置きまして、之を中央の觀測所に結着けて置く、茲には非常に精巧な寫眞機械がありまして、ドンといふ音を右の「マイク」に感じました時間と左の「マイク」に感じました時間には一秒の何十分の一といふ差があるわけでありまして、それを寫眞に依つてフィルムの上に現はしまして、その時間差に依つて拋物線を描いてその交會點を求むれば、それが音を發した場所といふことが定まるわけであります。これは一回位ではちやんと決めるわけに行きませんが、數回やればその平均點に依つて敵が撃出した位置を大體決めることが出来るのであります。

先刻山田さんからお話のありました旅順要塞攻撃に使つた二十八種榴弾砲であります。今日は日露戦争の記念日でありますから、旅順の攻撃に使ひました二十八種榴弾砲のこと、あの時の状況をざつと申し上げますと、旅順の要塞を攻撃する爲めに二百十數門の太さが九種から十五種までの大砲で攻城砲兵が編成されたのであります。さうしてそれを持つて参りまして旅順の要塞の前に展開致しまし

て、明治三十七年の八月十九日の午前六時に砲撃を開始致しました。それで十九、二十の二日間目標とする各砲臺に射撃を集中致しました。見てをると餘程壊れる。敵の火藥庫に弾が中たつて火柱が立つといふやうな凄壯な光景もあつたのであります。大體あれ位破壊したらもう大丈夫だらうといふので、二十一日から歩兵の攻撃前進に移りましたが、露兵の抵抗が頑強でありまして、死傷續出致しましたので、到頭盤龍山東砲臺と盤龍山西砲臺を占領したゞけで第一回の總攻撃が中止されたのであります。それが八月二十四日でありました。

その時これでは大砲の力が足りない。もつと威力のある大砲を持つて來ようぢやないかといふことになりましたが、遺憾ながらその當時現に持つてをる以上の攻城砲は日本になかつたのであります。そこで軍艦を射撃するのを目的として拵へた海岸砲臺の二十八種榴弾砲を卸して使はうぢやないかといふことになりまして、東京灣の要塞とか、下關、舞鶴といふやうな所から、臺場に据ゑてある二十八種榴弾砲を引卸して、それを旅順に持つて参りました。最後には二十門にまでなつたのであります。これが松樹山砲臺、二龍山砲臺、東鷄冠山北砲臺を陥すに偉功を奏し、又十二月の上旬に二〇三高地が占領されまして、そこに觀測所を置いて、二〇三高地からは旅順の港の中が見えますから、その港の中に隠れてをる所の軍艦を三日間で全部撃沈したのであります。非常な偉功を奏したのであります。其當時幸ひに敵はこちらの陣地を発見し得なかつた。若しその當時今申しましたやうな音源

標定機があつたと致しますれば、いつかこの陣地を發見されて、あの時の如く悠々と射撃が出来なかつたであらうと想像されるのであります。

私は先刻科學の力に依つて、軍の脚力を怪力化したと申しましたが、大體今日まで軍隊の歩きます距離は一日に五里、極く小さな部隊に於きましても一日に高々八里か十里位に制限されてをったのであります。このことは二千年前の昔アレキサンダー大王のベルシャ、インドの征討軍でも、豊臣秀吉の朝鮮征伐の時に於きましても、日露戦争の時に於ける彼我兩軍に於ても、又過去の第一次ヨーロッパ大戦に於けるカイザーの指揮してをりましたドイツ軍でも全く同様であります。これは人の力馬の力に限りがあるからであります、大砲に於きましてもその重さ、随ひましてその太さ、即ち口径は馬の輓曳力に依つて制限を受けてをったのであります。師團が持つてをりますあの野砲は、馬三駢即ち六頭で曳いてをります。ですから馬の力で制限を受けまして、あの大砲の重さは大體二トンとされてをります。でありますから大砲の太さも各國略々同じでありまして、七糎半位に制限されてをるのであります。

現今に於きましては内燃機關の發達に依りまして、戦車自動車で編成してをります機械化部隊は一日に八十キロでも、必要な場合には百キロでも行動し得るやうになつてをるのであります。前にも申しました二十八糎榴弾砲を旅順要塞前方の陣地に据ゑる時はどうであつたかと申しますと、海岸の砲

臺から大砲を卸しまして、船に積んで大連に持つて行つて、陸揚げをして大連から旅順の前方に送るのであります。ロシアの鐵道は軌幅が五フィートありますから、それを日本のゲージに直して軍用列車に依つて大砲を積んで、旅順から約五里ほど北の方の長嶺子といふ所に停車場を拵へまして、そこまでは汽車で運びましてそこに大砲を卸しましてから又二三里大砲を据ゑるべき陣地まで持つて行かなくてはならぬ。御承知の如く靖國神社に奉納されてをりますあの海岸砲でありますから、随分重い大きなものであります。それを引張つて行くのが大變であります。いろ／＼勘考しまして、あの大砲を四つの部分、砲身、砲架、架匡、側梁の四つに分けまして、その各部分を轎車に載せまして、お祭の時に山車を引張ると同じやうに、人の力で引張つたのであります。その各部分の車を曳くのには百五十人から二百人の人を要したのでありますから、一門の二十八糎榴弾砲を引張るのに七八百人、即ち歩兵一大隊位で引張つたといふやうな景況であります。而もその速度は二十門からの砲を展開致しましたのを平均致しますと、一時間一キロであります。半日一所懸命に引張つて一里位しか引張れなかつたのであります。

ところが今日に於きましては、二十八糎榴弾砲より更に／＼威力の雄大な大砲が、牽引自動車に依つて快速度に運搬し得るやうになつて居るのであります。この状態は丁度今から百數十年前に蒸汽機關が發明されて、イギリスを中心としてヨーロッパで産業革命が起つたのと同じやうに、軍備の上を目

下大革命を起しつゝあるのであります。殊に大東亞共榮圏といふ廣大な地域に互りまして、國防を全う致しまする爲には、從來と違つた構想を要することは明かでありまして、而も現代戦に於きましては軍需の生産に莫大な人員を要するのでありますから、限られた人員の範圍内でこの國防圏を擔當する爲めには、軍隊としましては卓越した機動力と、威力大なる兵器を是非必要とすることは明瞭であります。

然るに斯の如き軍機械化と申しますか、軍機甲化の理想がどうして十二分に達成が出来るか。それには申すまでもなく國內工業力、殊に重工業の飛躍的發展が第一の條件であります。更に根本問題と致しまして、其基礎條件としまして、國民全般殊に青少年の科學的知識乃至技術的素養の普及向上が十分でなくては、その目的を達成し得ないのであります。要しまするに人的にも物的にも量質ともに優秀なる科學力、技術力の徹底を期せなければならぬのであります。

而もその科學知識の普及は、唯机の上の理論的のものでなく、實際に即したものでなければならぬのであります。書物の上の科學知識が如何ほど豊富でございしても、事に當つて科學的處理が出來ないやうでは何の價値もないのであります。礦物や藥品などの化學式を如何に多く知つて居つても、實物が分らなければ物の役に立たないのであります。實學の振興、實物教育、現地訓練を主體と致しまして、逐次體系的なものを身につけて、活きた教育に依つて、眞に有意義なる知識を備へさせねば

ならぬと存じます。

殊に大東亞共榮圏を確立し、その盟主となつて大東亞の安定を確保致しまするには、將來兵力の増加を見ることも、又廣大なる地域に活動する爲には、軍の機械化にその重點があるといふことも、容易に想像せられるのであります。随ひまして單に一年とか二年とかいふやうな短期間の軍隊教育だけでは、到底軍の要求を十二分に充し得ないことは明かであります。更に第一線兵力の増加に伴ひまして兵器並にその原料材料の製造修理の方面に従事する者も、莫大な數に達します。この點から見ましても、國民の科學的知識乃至技術的素養の普及向上が必要であることは明かであります。

戦車とか自動車とか飛行機とかいふものは、何れも内燃機關即ち發動機を原動力とした兵器であります。唯それのみではないのであります。今日軍を裝備してをります近代兵器は千差萬別であります。小銃あり、重機關銃あり、輕機關銃あり、擲彈筒あり、歩兵も二種の大砲を持つてをります。歩兵平射砲と、歩兵曲射砲——曲射砲と申しますのは上の方に彈を打ち揚げて上から落とし込む大砲——かういふ二種類の大砲を持つてをります。即ち從來比較的技術に關係少いやうに思はれてをりました歩兵に於てすら、所謂辨慶の七つ道具の如きいろ／＼の新兵器で裝備されてをるのであります。その外大小各種口径の火砲があります。陸戦に於きましても口径が大は三十種から小さいのは三十七耗に至る澤山な大砲があるのであります。距離を測り或は觀測用に使ふ精巧な光學兵器があります。殊に

光や電氣を應用致しました兵器はその構造が精巧緻密でありまして、その種類が又多いのであります。其他多種多様の彈丸、火藥、火具類等がありまして、何れも科學の精粹であります。科學の總ての部門を包容網羅してをるものであります。何れの時代に於きましても兵器は喰ふか喰はれるかの戦に使はれるものでありますから、その國の最新科學の尖端を進んでをるものであります。換言すれば現在世界に於て軍隊の組織は非常に科學化されてをります。又將來も益々科學化されねば戦に勝目がないのであります。

斯の如くして科學の力に依りまして兵器は日に月に精巧となり、その威力は強化されつゝあるものであります。その兵器を操縦する者は誰かといへば、結局吾々人であります。弓矢刀槍の如き腕力的兵器時代に於きましては、兵員に要するものは主として精神力と體力であつたのであります。今日のやうな——私は智腦的兵器と申してをりますが、——頭の要るやうな智腦的兵器時代に於きましては、精神的にも肉體的にも優れてをるといふことは勿論のことであります。更に智力、換言すれば科學的智識の素養を要求せざるを得ないのであります。

然るに我國の現状は、精神的方面に於きましては全世界にその優越を誇り得るものあるに較べまして、國民全般の科學的知識は遺憾ながらまだ幼稚であります。斯く考へて參りますと、國民殊に青少年の科學的技術的智能をうんと向上するの必要を痛感せざるを得ないのであります。

こゝで一寸御參考までに「ヒットラー」がドイツに自動車を普及せしめるに付きました政策の概要をお話申上げて見たいと思ひます。御承知のやうにドイツは前のヨーロッパ大戰に敗けた結果、ヴェルサイユの平和條約に依りまして、兵力は十萬に制限され、大砲も野砲以上のものは造つてはならぬ。戦車の製造は禁止をする。軍用飛行機は使用してはならぬといふやうな可なり苛酷な制裁を課せられたのであります。さうして一九三三年にヒットラー政権が確立しまして、この度の大戦の勃發致しまするまで僅か五六年の短時日の間に、皆さんの御承知のやうな偉大な戦果を擧げる如き大軍の新裝備を完成致しました。このドイツの精銳なる科學技術と、その充實したる工業力に付ては、何人も賞讃する所であります。併しあの優秀な而も莫大な新兵器も、之を自由自在に操縦し得る多數の將兵を鍊成充實し得なかつたならば、無用の長物たるに過ぎないのであります。これが爲にヒットラーの苦心は洵に慘憺たるものがあつたのでありまして、一大教訓を垂れてをると思ふのであります。

それは御承知の様にN・S・K・Kと申します團體——これはNationale Sozialistische Kraftfulr Korps?の頭文字を取つたものであります。ナチ自動車團とでも譯すべきであります。——このナチ自動車團と申します國民的團體を作り上げまして、この度のヨーロッパ戦争開始前までに既に五十萬人の團員を有する強力なものにしたのであります。さうして法令に依りまして、このN・S・K・K團體を

國民の自動車教育の豫備訓練の責任者と指定致しまして、入營前の青少年に徹底した豫備訓練を行いました。

次に教育の爲にドイツを中部と東西南北の五つの管區に分けまして、各管區に大體少將級位の教育監を置きまして、又教育機關と致しましてはミュンヘンに自動車技術學校を拵へまして、そこで教官の養成を致します。全國に二十三の自動車學校を設けまして、青少年の自動車訓練に當らせたのであります。その教育は單に自動車を運轉する。分解する。修理する。手入するといふやうな技術的事項に止まらないのでありまして、規律が嚴肅で、愛車心が旺盛で、豪膽で沈著で、而も細心、眞に自動車を我がものとする徳性を完備するを主眼として教育したのであります。

開戦前にドイツでは機械化訓練といふことを國民組織の中に包含させまして、御承知のやうに十歳から十八歳までの男子は「ヒットラー・ユーゲント」として青少年團員になつてをりますが、十六歳になつた者からは選抜致しまして、機械化部と飛行機部と海軍部の何れかに入部させまして、機械化訓練を受けさせます。この教育が終了しまして、十九歳の時に習得した技術で勤勞奉仕をさせて、その後で機甲部隊なり空軍なり海軍なりにそれ／＼入營をさせて、本格的の軍隊教育を受けしめるといふやうな方法を執つてをります。殊に注意すべきことは、最も感受性の強い知識慾の旺盛な少年時代に齊しく機械化訓練を施しまして、この度の大戰に於て機甲部隊の非常な擴充に伴ひまして、大いに貢獻

したわけであります。

第三には、ナチ政權が確立しましてから、「トウド」といふ博士に命じまして、國有自動車道路を計畫させたのであります。これはアウトバートンと申しますが、この國有自動車道路は往路と復路を全く區別してをりまして、中間に二三間の綠地が置いてある。さうして平面交叉を全く許さない自動車道路であります。この計畫は延長が一萬キロといふことでありますから、二千五百里に達する大規模のものであります。開戦直前までに五千キロを完成したといふことであります。この自動車道路がこの度の戦で軍隊の移動に非常に役立つたといふことは明瞭であります。

このアウトバートの開設の目的とします所は、今申しましたやうな國防上の意味を含んでをること、は勿論であります。他面從來のやうな地方の中小都市を中心とした道路網、例へばマグデブルグ、ハアレ、ライプツヒヒ、ドレスデンといふやうな地方の都市を中心と致しました道路網では、比較的道の曲りが多く、又道が狭いから、今日の如き大地域經濟の下では能率が十分でない。そこで成べく直線で速いスピードで駆け得るやうな道路を必要とするといふ經濟的の意味を考慮したといふことであります。

このアウトバートンは政府の直轄工事で強行致しまして、當時巷に溢れてをつた失業労働者を使つたのであります。トウドといふ博士は非常に偉い人でありまして、指揮統御が頗る適當で、労働者を

道を造つてをる間にうんと訓練を致しまして、戦の始まるまでに立派な軍隊式の「トウッド建設團」といふものを作り上げたのであります。この建設團が戦が始まりましたから、廣範圍に互ひまして道路の修繕、交通路の確保に従事する。又ゲリラ戦に對して交通路の確保をする多數の捕虜を使ひまして鐵道の補修をする監督に當る。——ロシヤの鐵道は軌幅が違つてをりますから、それを皆直さなくてはなりません。——又フランス海岸に廣大な防禦工事をする。それ等に使用して非常に國家に貢獻したといふことであります。

第四に、K・D・F車、これは Kraft Durch Freude といふ字の頭文字を取つたものであります、歡喜力行車とでも譯すべきであります。この歡喜力行車といふ名前の附いた大衆車の様式を決めまして、その車を安く分割拂の方法で國民に購入させ、さうして自動車の普及を圖りました。この自動車は聞く所に依りますと五人乗でありまして、上に若干の荷物が積めるやうになつてをる。それが九百六十マルクといふことであります。如何にドイツでも九百六十マルクでは賣れないと思ひますが、これは政府が何か補助の方法でも講じてをるのだらうと思ひますが、兎に角價は九百六十マルクで、一週間に三マルクづつと五マルクづつ、の二つの分割拂の方法があるといふことであります。この大衆車の狙ひ所は、國民所得の増加に依る購買力を、捨て、置けば、輸入品である食糧とか嗜好品に向ふのであります、それを自動車の購入に轉用させて、自動車の普及を圖りますと同時に、自動車工

業の振興を圖る所謂一石二鳥の策を執つたわけであります。

次には特に有力な委員を設けまして、自動車部品の統一簡易化を徹底的に圖りました。もう一つはこれは面白い方法でありまして、戦時に機甲部隊を擴充する爲には、非常な澤山な自動車が必要であります。そこでその必要な自動車の保有量の増加を圖ります爲に、ヒットラー政權が確立しまして四年目の一九三六年に、大型自動車の標準型を定めまして、國有鐵道と並行の道路上に鐵道省をして自動車運輸を開始させました。詰りバスやトラックの運輸を始めたのであります。さうして比較的貨物や乗客の少い中間驛を閉鎖致しました、さうして貨物列車を準急位の速度で運行するやうにしまして、戦が始まるとこのバスやトラックを全部徵發して、機械化師團の編成に徵用したのであります。この方法に依りますと、地方の交通が窮迫致しますから、戦争が始まりましたから閉鎖致しました中間驛を再び復舊致しまして、各驛に停つて行く列車所謂「ブンメル、ツウグ」の運行を始めたといふことであります。鐵道要員の不足の對策は、退職の老人を再用し、又女子の全面的採用に依りましてこれを補充したといふことであります。

その外いろ／＼ございますが、兎に角ドイツ國民の科學的知識が比較的高いに拘らず、教育方法に今申上げたやうな方法を執り、又自動車の普及を圖る爲にも各種の方策を講じたのであります、さうしてドイツの「モーター化」を計り以て國防の充實に資したといふことは、我國の機械化促進の爲



めに大いに味ふべきことであらうと思はれるのであります。

御承知のこと、思ひますが、戦車の今日の大體の状況を申上げて見たいと思ひます。戦車といふあゝいふ考へは、ずつと昔からもあるのであります。日本の歴史に現はれてをりますのは、加藤清正公が朝鮮征伐の時に龜甲車といふものを使つてをります。これは慶長の役に朝鮮の晋州城を攻撃する時に、城壁が非常に強い爲めに、掩蓋を拵へた車で、その下で城壁を壊すといふのであります。これは模型が今熊本城の宇土櫓に保存されてをります。もう一つは維新前の有名な殿様の水戸烈公が安心車といふ車を拵へてをります。それは丈夫な車の上に鐵板の大筒を附けまして、それに數個の銃眼が開いてあります。武士が二人乗つて、中から鐵砲で撃つやうになる。これは獸力で曳くのであります。さうして牛に損害を受けさせない爲めに鎧を被せてをるといふやうなもので、これは現物が水戸に准國寶として保存されてをります。

さういふ考へは昔からあるのでありますが、今申します戦車といふのは、發動機を原動力としたものであります。前のヨーロッパ大戰の時に、彼我全く膠着した陣地戦になりました。その時に急襲的に敵の不意に出て、歩兵の突撃路を開いてやるといふ爲めに、イギリス軍が考案したのであります。さうして一九一六年のソナムの攻撃の際に初めてこれを使ひまして、交戦軍は勿論、世界の軍事界を驚かした新戦闘用具であります。ところが當時その速度は一時間に僅かに六七キロでありまして、人

間の駆ける位の程度に過ぎなかつたのでありますが、戦後大いに研究改善せられまして、技術の進歩と相俟つて、今日では速度が非常に早くなつてをります。先づ大體平均致しますると、一時間に四五十キロ、十里乃至十二三里といふ所であります。運動も非常に軽便になりました。例へば非常に早い速度で駆けてをる時、不意に停ることが出来、さうしてその場所をぐるつと後ろを向くことが出来るやうになりました。又鋼の冶金術の發達に依つて、比較的薄い鋼板で機械や人員等を掩護することが出来るやうになり、即ち掩護が確實となりました。又敵彈の危害を減少にする爲めに目標が低小になり、恰好がスマートになりました。この進歩に伴ひまして、今日の所謂裝甲軍と申しますか、機甲軍と申しますか、所謂機械化兵團の組織にまで發達して、機動性を大いに發揮するやうになつたのであります。

戦車は今日では大體重、中、輕の三種類に分けてをります。重戦車と申しますのは先づ重さが三十トン位、中戦車は約二十トン、輕戦車は十トン以下、この三種類に大別してをるのであります。超重戦車と申しまして、重量が五十トン乃至百トンといふやうな非常に重い戦車を使つてをる國もありますが。現今ではまだ特例のやうであります。その外に水陸兩用戦車と申しまして、陸上を駆けてをると同時に、前に川があればそれに飛込んでスクリューで小蒸汽のやうに川を渡り、又陸地をキャタピラで駆けて行くといふやうな構造になつてをるものもあります。

武装としてどういふものを備へてをるかと思はれ、三十トンの重戦車では口径七・五種の師團の砲兵の持つてをる野砲と同じ太さのもので、もつと短いのでありますが、七十五ミリ位の大砲を据ゑてをるのが通常でありましたが、段々大砲が大きくなる傾向がありました、今日では十種半位のものを据ゑるやうになりつゝあります。中戦車の二十トン位のは、従来は三十七ミリ詰り四種位の大砲を据ゑてをつたのでありますが、今日では四十五ミリから五十ミリ位の大砲が普通になつてをるのであります。軽戦車詰り十トン級以下の軽い戦車は、新型のものでは二十ミリ位の太さの機關砲を据ゑてをるのが普通であります。

發動機の馬力はどうかと思はれ、重戦車に於きまして大體重さ一トンに付ての割合で十乃至二十馬力、平均十五馬力位のものでありますから、三十トン戦車であると約四百五十馬力といふわけになつてをります。

偕て第一次ヨーロッパ戦後に、今日のやうに機動的に作戰する装甲軍主義を唱へたのは一體誰かといふことであります。これはイギリスのミルンといふ元帥であります。このミルン元帥の所説の主要を申しますと、「前のヨーロッパ戦に於て戦が全く膠着して、なか／＼解決しなかつたのは、主に機關銃と鐵條網が跋扈したからである。將來の戦は須く速戦即決でなければならぬ。これには軍に偉大な武力と迅速な活動力と強靱な装甲とを與へなければならぬ。それには装甲軍が最も適當してをる、イ

ギリス軍は須くその大部分を装甲化さなければならぬ」といふことを唱へたのであります。

而して更に説明を加へて申しますに「今日では空に飛行機あり、地には戦車がある。作戰の方式は全く一變した。開戦と同時に大空軍が敵の中樞地帯を爆撃に行くだらう。續いて大装甲軍、所謂機械化軍が主力軍の遙かに前方を、國境を越えて敵國內に侵入して、要地を攻撃し或は敵情を搜索する或は敵の集中するのを妨害して、味方の作戰を有利にするだらう。次に段々主力軍が追つて來て、いよ／＼主力軍の大會戦の時機になると、装甲軍は敵の側背に廻つて、後方を攪亂し、或は後方から敵を攻撃して、主力軍の正面からの攻撃と相俟つて、敵を殲滅するといふ作戰に出るだらう。これは丁度古代ローマ時代に於て甲冑に身を固めた騎兵の大集團が、戦鬪の勝敗を決したのと全く同様である」といふことを唱へたのであります。

その當時のイギリスの軍の機械化熱は大變なものでありまして、随分大きな實驗もしたのでありますが、いろ／＼の事情で十分の實行の出來ない内に、今回の大戦争となつたのであります。

右様の次第で、イギリス軍の初めて考案した戦車をもとにして、而も前のヨーロッパ戦後にイギリスで唱へた意見をそつくりそのまゝドイツが實行したといふ景況になつてをるのであります。眞似たわけではないのでありますが、所謂議論より實行といふことこのよゝい實例をこゝに一つ示してをると思はれるのであります。

倍てこの機甲師團の編成はどうかといふことであります。これは何れも軍の機密に属することであり、確信には判らぬのでありますが、フランス攻撃の時にドイツの採りました機甲師團の編成は、一ヶ師團で大體戦車五百臺位が中心になりました、これに歩兵が一旅團、重砲（太さが十糎以上の大砲）が二十四門、野砲が三十六門、工兵が一大隊、架橋材料隊、これ等を總て自動車編成にしてくつつけたものであります。一ヶ師團の自動車總数が概ね三千輛といふことであります。その行軍長徑が大體百キロでありますから、二十五里になるのであります。詰り戦車を樞軸と致しまして、これに自動車に乗せました各兵種を適當に編合致しまして、巨大な機動性を與へた戦略單位といふことが出来るのであります。

一九四〇年の六月にドイツ軍がフランスのマヂノ線のセダンとモーブージュの間を突破しました。あの時に使ひました機械化師團の兵力が八師團といふことであります。その中の五師團は戦車を持つてをる所謂機甲師團であり、外の三師團は全部自動車に乗せた機械化師團と申しますか、快速師團であつたといふことであります。一昨年六月に獨ソ戦が始まりました。その際ドイツが持つてをった機甲兵力は、これ亦明確には判らぬのでありますが、さういふことを専門に研究してをる人の話を聽きますと、少くも三十ヶ師團以上と判定されてをります。如何にその規模の雄大であつたかといふことが察知出来るのであります。

マヂノ線を突破された後、フランス人が書きました書物を読んで見ますと、「マヂノ線突破の際には、敵の飛行機が急降下爆撃に依つて要塞の上になんと爆弾を降らした。その爆撃が止むと、間髪を容れず、戦車の波が突撃して來た。その戦車の波は唯一線でなく、第二線、第三線、第四線といふ風に連続突撃をして來たので、アツといふ間に蹂躙されたのだ」といふことを書いてをりますが、これは偽らざる告白であらうと思ひます。

要しまするに國防の完璧を期しまするには、澤山の優れた兵器と、それを扱ひまする澤山の優れた人とを軍に送らねばならぬのであります。而も軍の精銳は、唯軍隊教育だけで求め得べきものではないのであります。その根柢は全く國民の訓練如何に依存するのでありますから、茲に於て國內工業力の飛躍的發展と同時に、國民の科學的知識乃至技術的素養の普及向上が叫ばれる所以であります。以上は主として軍事上の見地から申述べたのであります。更に他の方面、即ち大東亞建設の爲めの實力涵養といふ方面から觀察して見ましても、これ亦何と申しましても日本精神の偉大な力、即ち一億國民の一致團結した精神力に俟つべきは勿論であります。これに伴ひまして技術方面並物質方面の實力を、歐米強國に優ることも劣らぬ程度に發達充實せしめまして、これに依つて大東亞の諸民族をして心から我に悦服せしめるだけの優越なる指導的立場に立つことを心懸けねばならぬと存じます。戦に勝つたから強いのだといふ所謂獨善主義では、心から人はついて來ないだらうと思はれるの

であります。この點からしましても、吾々日本國民全般の科學知識の向上といふことが必要であることは勿論であります。

偕て科學知識の普及向上が必要であることは明瞭であります。一體日本人の頭はどうかといふことであります。而して日本人の頭腦は先天的にこの方面に優れてをるといはれてをるのであります。新聞に出てをりましたから御承知と思ひますが、十數年前のことです。サンフランシスコの小學校に於ける日本兒童の成績が著しく優秀であるといふ理由を發見する爲に、カリフォルニア大學の心理學教授が委員となりまして、アングロサクソン系のアメリカの兒童と、ラテン系の兒童と、日本の兒童の頭腦の比較試験をやつたことがあります。その報告書は非常に厚いものであります。その結論は、アングロサクソン系のアメリカの兒童はラテン系の兒童に優つてをる、日本兒童はラテン系兒童に優つてをるといはれてをるアングロサクソン系の兒童よりも遙かに優秀であつて、而も頭の素質が科學數學方面に發達してをると結論されてをるのであります。又東京文理科大學教授の田中寛一博士の心理學上から各國兒童の比較試験を行ひました結果に依りまして——これは公刊されてをりますが、——日本兒童が一番優秀な頭腦を持つてをるといふことを認めてをられるのであります。

然るにも拘らず現在に於きまして國民一般の科學知識がまだ歐米人のそれに及ばないといふことに付きましては、これは過去に於ける教育上の政策、教育の施設その他いろいろの原因もありませうが

主として我國が機械的文明に觸れることが、歐米諸國に比して著しく遅かつたといふこと、それに附随しまして國民全般の科學に對する無關心といふことに歸するであらうと思ひます。兎に角國民に接觸のない科學でありますから、自然に國民全般から疎んぜられてをる。随ひまして科學は學者の専門の仕事に過ぎないものとして、最近まで過して來たのであります。今日になりまして科學の振興がどうかのうのといふのは、一向不思議ではないのであります。加之國民に關心のない科學は、高い理想を持つてをらない政治家から見放されまして、教育の施設、教育の豫算は著しく制約を受けてをつた有様であります。

國民の科學に對する無關心の適例もありますが、時間が段々詰りますから省略致しまして、我國の官立、公立、私立を通じまして、専門學校以上の就學率を、——これは昨年であります。或る權威のある政府筋の調査を聞いたのであります。アメリカは理工科系が五〇、法文科系が五〇、ドイツは理工科系が五四、法文科系が四六、ソ聯邦は理工科系が七〇、法文科系が三〇、日本はソ聯と全く反對でありまして、理工科系が三〇、法文科系が七〇であるといふことであります。而も我國に於きまする理工科系三〇の比率が、昨年までは漸次低下する傾向にあつたといふことであります。この現象は目下實施されてをります學制の改善充實に伴ひまして、漸次好轉するではありませうが、かういふことは我國の將來の爲めに國民全般が慎重に考慮すべきこと、思はれるのであります。

我國兒童の優秀な頭の眞價を發揮せしめず爲めには、科學が面白いものであるといふやうに、科學に心を惹かれる人の數が現在よりずつと殖えるやうな教育方法を執らなければならぬのであります。從來學校に於ける科學教育は、皆様も御同様でありましたらうが、兎に角詰込み主義でありました。これでは科學は無味乾燥でありまして、魅力といふものは少しも生れて來ない。生徒の科學心は少しも伸びないのであります。科學の眞の面白味を體驗させるやうな教育を必要とするのであります。これには教育資材、教育施設の整備が第一要件であります。今日の如き進歩しました映畫、科學映畫といふやうなものを遍く學校の教育に利用するといふことも一つの方法であらうと思ふのであります。こゝに學校教育、家庭教育、社會教育の各教育を通じまして、革新的改善を加へる必要があるのであります。唯制度のみでなく、資材と施設の完備充實といふことの必要を認めざるを得ないのであります。

一昨年から從來の小學校が國民學校となりまして、教育の方針に非常な改革を加へられてをりますのも、今申しました趣旨に外ならないと存じますが、これは單に國民學校のみならず、中學校に於きましても、高等學校に於きましても、私は殊に女學校に於て然りと信じてをるのであります。科學教育の必要といふ趣旨は、唯男が心得てをるだけでは足れりとしないのであります。家庭に於きまして子弟の教育に重大なる役割を持つてをる主婦、又將來主婦たるべき女子に十分に徹底せしめて置く

必要があります。

御承知のやうに子供の知識慾といふものは頗る旺盛であります。家庭に於きまして十分これを啓發指導して、子供に所謂科學する心に對する素地を植付けなければならぬ。私は科學する心に對する素地といふのは、子供に數に對する觀念、物を計るといふ觀念、時間に對する觀念を知らず識らずの間に植付けて、頭を組織的に發達せしむるにありと信じてをるのであります。

ドイツにおいでになつた方は御承知でございますが、ベルリンのチャーヤガルテンなどを散歩してをりますと、六つか七つ位の小さな子供が吾々外國人にでも「小父さん、今何時ですか？」と尋ねます。「何時だよ」と言ひますと「有難う！」と言つて飛んで歸ります。これはお母さんに、何時まで遊んで來ていゝ、何時には家に歸れと言はれてをります爲に、時間といふものが始終頭にくつついてをるからであります。ところで吾々の家庭に於きましては、子供を外に出すのに多くは「今日は休みだからゆつくり遊んで」おいでと言つて出しますが、日の暮れ時になつて歸つて來ないと、お祖母さんなりお母さんが門に立つて心配して待つてをる。何故何時までに歸つて來いと言はないかといふ問題であります。時計を持たなくても時を知るべき方法はいくらでもある。又詰らぬ話であります。ピスケットなどを子供にやる。「澤山食べなさいよと言ふが子供が四つなり五つなり食べ進むと、そんなに澤山食べてはいけません」と小言を言ふ。子供に三つなり四つ食べさせる積りなら、何故初め

から數を限つて示さないかといふ問題であります。又子供は機械的の玩具などをいじつて分解することを好みます。さうすると、お母様などが「壊すからお止しなさい」と言つて留める。お母さんが、これはかうするものだ、ねじはかうして廻すものだと言つて何故指導してやらないかといふ問題であります。かういふ風にして所謂科學する心に對する素地を植付けて、自然にその方に頭を向けさせることが大事であると考へてをるのであります。

私の先輩で永く東京砲兵工廠長をしてをられた松浦といふ中將がおります。この方が先年來かういふことを唱へられてをります。非常に面白い意見でありますから御紹介致して置きますが、それは女學校の教授科目に製圖科と簡易な木工科を是非加へる必要があるといふことを提唱されてをるのであります。その理由とする所は、コンパスで圖を引くことは女の仕事に最も適當である。戦時下生産擴充を要する今日であるから、男子に代換して女子を使ふのは機宜に適當であり、應急的の處置として必要であるのみならず、圖を引くことに依つて女の子に技術的思想を養成して、將來家庭の主婦となつた場合に、子供の教育指導に非常に便利であらう。もう一つ簡易な木工科を加へよといふことは、家庭の主婦として釘一つ打てなくても困る。鉋一つ研げなくても困る。俺の家の下女は輕節を削る鉋が切れなくなると、俺に研いで呉れと言ふ。それでは困るので、椅子の小さな修理位はドイツ婦人のやうに、その位のことは先づ出来るやうな程度にしなくてはならぬ。同時に工作に對する趣味を

喚起させるのであるといふので、私が七十一であるますから、松浦中將閣下は七十六七と思ひますがこの趣旨を東京の高等女學校長に説いて廻られたのであります。

其の話を聽きますと、多くの校長は同意をするが、これが實行には躊躇をする、その理由を訊くと子供を女學校に出す所の多くの家庭に於ては、子供に職業的教育を施すやうな女學校に入學させることを好まない。又夫たるべき青年男子も虚榮心から職業的教育を受けたやうな女子を妻とすることを躊躇するからだ。今以て實科女學校といふ實科の二字が附いてをると、入學を志願する者が非常に少ない。その二字を取つて高等女學校になると、うんと入學試験を受けに来る。今度は文部省の意向で實科といふ字を取るやうになつたさうでありますが、さういふ有様ださうであります。それで中将は、將來の日本はそれではいけないのであつて、著實で實際的でドイツ婦人のやうにならなければならぬと非常に慷慨して話をされてをつたのであります。面白い話でありますから、附加へて申上げて置きます。

大分時間が経ちましたから今日はこれで失禮致します。(拍手)

## 制空と決勝

(本會講演)

海軍中將 安東昌喬

四〇

お歴々の皆様の前でお話申上げるとは、洵に光榮の至りに存じます、昨日大本營の發表にありましたやうに、山本大將が戦死をされました、洵に國家重要な材を失つたのでありまして、皆様と共に洵に残念に堪へない次第であります、山本元帥は私は現役中に三回同じ所に勤務したことがございます、殊に航空關係に於きましては、相當長い間御一緒にをりました、今日朝日新聞を見ますと、米内大將の山本大將觀が出てをります、これが最も山本大將の素描を描き出して居ることと存する次第であります、一言にしていへば、まこと、眞心その人でありまして、軍人に賜はりましたお勅諭を完全に實行した人だと、眞に尊敬の念に堪へない次第であります、去年の春のことでありまして九州の方へ講演に参りました時分に、山本大將といふ人はどういふ人かといふことを聴かれまして、まあ簡単にいへば、沈毅果斷、奇略縦横、部下を愛すること慈父の如く、意志の鞏固なること鋼鐵の如し、こいつて私は批評を加へたのでありますが、まだそれでは足りないであります、眞に何處一つ非難の打ち所のない名將であります、それが前線に立たれまして戦闘を交へた上、遂に飛行機上に戦死を遂

げられたのでありますが、今年の三月三十日の日附で以て手紙を戴きました、この中の最後の所にかういふことが書いてありましたから、思ひ出して一寸拾ひ書きして持つて参りました、皆様に御紹介致しますが、「小生最早在職三年七ヶ月と相成り、世が世ならばとつくに引下るべき所に候へ共、目下の事態にては宜敷しくお願ひ致しますと申す譯にも参らず、コツ／＼勤勞、其中一花ばつと咲かせたきものと苦心致し居り候次第、御推察下されたく候」かうありました、私はこの手紙を見まして、一花ばつと咲かせたいといふやうな野心があつてはいかぬ、さういふ煩惱が残つてをつてはだめだといふことを書いて出さうと思つてをります中に、旅行やら何やらで、遂にそれを出さないでをりました、今日翻つて考へて見ますと、この一花咲かすといふのは、決して煩惱から起つたものではない、自分の野心から起つたものではない、詰り欲望のためとか何とかいふことは全然ない、私心は一つもないといふことが分りました、洵に恥かしく存じて居る次第であります、かういふ國家の柱石となるべき人を亡くしたといふことは、吾々は洵に残念でしやうがないのであります、幸に海軍の中にも澤山の名將がをりました、山本大將亡き後も決して海軍の備へに搖ぎが起るやうなことはないことと信じてをります、山本大將は總て海軍のことに付きましては詳しかつたのであります、殊に晩年に於きましては、晩年と申しましても大佐以後であります、航空の方に非常に力を入れてをられました、將來は優勢なる空軍を以てしなければ、戦捷を得られないといふことを固く信じてをられま

した、最初の内は霞ヶ浦航空隊の副長、これは私は同時に勤務してをりましたが、それから赤城の艦長、航空戦隊司令官、それから航空本部の技術部長、この時も私は勤務を同じくしてをりました、それから航空本部長、かういふやうな経歴を持つて居る方であり、随つてこの戦捷の端緒を得るのには勿論、又戦捷の結末をつけるのにも、飛行機が非常に大切であるといふ確信を持つてをられたのであります、ハワイの海戦に於きましても、非常にこの仕事は冒険に屬するものでありまして、海軍部内でも相當の異論があつたのであります、ところが山本大將は斷乎としてその信念を變へなかつた、これがいよ／＼決定されましたのは、あの斷行しました數ヶ月前のことであり、その後に於きましても、些かもこれに對して動搖するやうなことがなかつたさうであります、勿論大本營の決定に依つて行はれたものではありますけれども、山本大將の確乎たる信念の下に、その鞏固なる主張がハワイ海戦のあゝいふ大戦果を挙げ得たことと考へられるのであります、今度の戦で特に目立つて見えますことは、戦果の方は別と致しまして、反樞軸が、殊にアメリカが日本に對して非常な誤算をしてをつた、餘りに見縊つてをつたといふことが顯著に見られるのであります、殊に我が航空隊、陸軍の方は相當に分つてをつたやうであります、海軍の航空隊に對しては、殆ど向ふでは分つてをらなかつた、まあ蔣介石あたりも陸軍の航空部隊だけを打算致しまして、さうして大丈夫勝てるものと信じてをつたやうであります、豈圖らんや一番最初に爆彈の洗禮を受けたのは、海軍の航空隊からで

あります、その後海軍の航空部隊が、支那事變に於きましても、非常に陸軍と緊密なる協力を致してをりますことは、御承知の通りであります、大東亞戦勃發當時に於きましては、海軍の航空兵力といふものも、まだ一向不十分なものであつたのであります、今日では著々と増強せられまして、アメリカの生産能力には及ばないのでありますけれども、大東亞の地域に於きまして戦闘を致しますのには、十分成算があるものと信じてをります。

本題に入ります前に、海軍の航空兵力といふものはどんな風に構成されて居るか、又海軍ではどういふやうな武器を使つて居るかといふやうなことを、極く簡単に申し上げます、爾後のお話の便宜にお備へしたいと思ふのであります、海軍の航空兵力は大體二つに分けることが出来まして、一つは海上の航空兵力、もう一つは基地の航空兵力、海上の航空兵力といふものは、航空母艦を主と致しますもので、軍艦、潜水艦等に搭載致してをります飛行機であります、航空母艦は大小に依つて異なりますけれども、大體積んでをります飛行機は、攻撃機と戦闘機、稀には偵察機を積んで居るものであります、戦闘機は御承知の通りに、一人乗のやつを日本では使つてをりまして、今では低翼單葉の立派な物が出来てをります、殊に今年出来上らうとしてをります物は、一層改善が加へられまして、世界で一といつても二と下らぬやうな物が出来つゝあります、攻撃機といふ方は二種類に分けることが出来まして、一つは非常に高い所から大きな爆彈を落します艦上攻撃機と申します、俗にこれを艦攻と略



してをりますが、その種類と、それから急降下爆撃機であります、これは艦上から發着するのであります、攻撃機よりも機體が小さくありまして、その代り機體の構成が頑強に出来てをります、何しろ七千メートル位の高度から、凡そ垂直から二十度位、この位の角度を以て降りて参ります、三千メートル降りますのに、凡そ二十秒位しかかゝらないのであります、この一番最終の速度、これを吾々の方では遅で申してをりますが、三百五十ノット乃至二百五十ノット位の速度になるのであります。随つてかういふ速度のものを引起しますには非常な壓力が加はりますから、普通の構成では空中分解してしまふのであります、偵察機は陸軍で用ひてをられる偵察機が非常によく出来てをりまして、海軍の方では近頃かういふものをやはり使はなくちやならぬといふふやうになつ居るやうであります、これは速度が非常に早く、偵察の任務に服するのでありますから、別に澤山な武器を持つて居る必要もないのであります、それから軍艦に積んでをりますやつは、概ねフロートのついた偵察機でありまして、水上機であります、これにも大きいのと小さいのとありまして、普通の小さいのは巡洋艦以下に積んでをります、速度が速くて戦闘機の代用が出来るやつであります、近頃アリューシャンであるとか、又は支那事變あたりに、盛んに向ふの戦闘機と渡り合つて、相當の結果を見てをります、大きい方の水上機は、遠くの方に偵察に出るやつであります、航続距離が長いのであります、

それが軍艦、

等に積んで居る飛行機でありまして、その外に海軍には、先程申しました基地の飛行機があります、これは非常に足の長い大きな飛行機でありまして、今日本では中型攻撃機と申して居るのがそれでありまして、これは陸上の基地を根據と致しまして、遠方に飛出して行くやつであります、ハワイの海戦には一つも使用されなかつたのであります、マレー沖の海戦には、全部この飛行機でやつたのであります、それからマーシャル群島に敵の航空母艦が攻撃して参りました時も、全部この中型攻撃機であります、その他西南太平洋に於きましては、これが盛んに使はれて居るのであります、外國の飛行機に較べまして、防禦の點は劣つてをりますけれども、速度の點及び航続距離の點から申しますと、速度は伯仲の間或はやゝ劣つて居る憾みがあるかも知れませんが、航続距離は斷然外國の飛行機よりも長いのであります、殊に近來出来つゝありますところの中型攻撃機は更にこの航続距離を増大してをりまして、到底外國が及び得ないのであります、航続距離が長くなりますと、飛行機の行動半徑がそれだけ大きくなる譯でありまして、大體飛行機の活動量といふものは、行動半徑の二乗に反比例するといはれてをります、遠い所に活躍の出来る飛行機でないと、基地が自分の攻撃目標

に對して相當接近してをらぬと出来ないことでありまして、太平洋の圖を見ますと、我が大東亞共榮圏の基地に於きましては、さういふ基地が次々と得られるから都合がよいのでありますが、もう太平洋を隔て、アメリカに對しますと、さういふやうな都合のよい所がないのであります。

次には海洋に於ける航空戦に特異の點があるといふことに付て、一寸お話し上げて置きたいと思ひますが、何しろ渺茫たる大洋の中でありまして、何百哩となく飛出して戦鬪行動をとつて、そして又何百哩歸つて来る、基地ならばまだしも、動いて居る航空母艦に發着しなければならぬといふやうなことは、なか／＼難しいことでありまして、これは航法、即ち空中の航法に於て相當難しい學理から割出したところの航法術を熟知してをらぬと出来ないことでもあります、今日の飛行機では、もう大體飛行機の一行動中に必ず夜が含まれるのでありまして、夜間に互つての長い間の航續といふものは、自分の位置を知りますのに、山、島等が見えませす所で推測航法をやりますものとは、全然違つてをりまして、天測航法をやらなければならぬ、これは海軍の方では、大體士官は兵學校に居る時分からして、航海術をやつてをりますから、比較的やさしく出來ますが、少年航空兵出の者、或は元から下士官兵でをつた者に對しては、相當これを苦心して教へなければならぬのであります、尤も機械は非常によい物が出來てをりまして、みんなスライド・ルールみたいなものが澤山出來て居るのであります、それで太陽の高度を計りさへすれば、それに依つてその時の位置が、機械的に現れて来る譯であ

ります、軍艦の中でやつて居るやうにかた／＼やつて、十五分も二十分もかゝつて位置が出るやうでは、飛行機では何十哩と飛んで行つてしまふ、大抵は五分以内に自分の位置を知るやうにやらないと効果が無い、今日では少年航空兵出の者は固よりのこと、元からの下士官でも相當上手になつてをりまして、先頃元大日本航空にをられました松永少將のお話に、下士官がやつても三哩と違ひませぬといはれてをりました、さういふやうに航法に於て非常な難點があるのと、大海の眞中を飛んでをりました、航空母艦が十分に巧く見つからなかつた、これは今のところは無線で以て指導してをりますから、大抵は間違ふことはないのではありませんが、どうかすると間違ふことがあるのであります、さういふ場合には海上に不時着するより外はないのであります、本當に平生の訓練から命懸けでしなくては出來ないことでもあります、それから爆撃を致しますのにも、雷撃を致しますのにも、目標が軍艦であるとか、航空母艦であるとかいふものでありますと、これは常に動いて居るものでありますから、これに對する確なる爆撃或は雷撃を加へるといふことは、非常な訓練を要する譯であります、これ等が陸上の航空戦と海上のものとは、餘程本から違つて居る點のやうに考へるのであります、今日までの大東亞戦争の経過を見まして、航空戦といふ方面のみを研究して見ますと、飛行機の性能、發動機の性能、これ等は外國のものと比較致しましてそれ程の差はないのであります、日本の方が優つて居る點もありませんし、向ふの方が優つて居る點もある、大體伯仲の間にあるものと見て差支ないのであります

が、さて叩き合つて見ると、何時でもこちらが勝つ、これは一體どうしてかういふことになるかと申しますと、術力と精神力の違ひです、昔の偉い劍客などが、もうたゞ劍の道に精進しまして、一生涯この方にいそしんでをって初めて劍の達人になれたやうに、今日の飛行機乗りでも、本當に日々夜々の飛行機の取扱に練熟してをりませぬと、よい結果が得られないのであります、これがマレー沖の海戦の時などを見ますと、何しろあの時は潜水艦で見つけて電報で通知が参りました、それからいざといふ譯で直ぐ飛出した、それが相當遠い距離でありまして、而もその中型攻撃機の基地は數ヶ所に分れてをったのであるから、これが所謂適時適所にこちらの兵力を集中して、集中攻撃を加へることが出来たといふことを振返つて見ますと、無線にしましても、哨戒をして見つけたのにしても、その行動を誤らずやつて行くといふことには、一糸亂れざる總ての點に於て練達の域に達して居なければ、かういふやうな結果は得られなかつたと思ふのであります、珊瑚海、海戦に於きましては、向ふの航空母艦二艘、こちらの方が二艘、所謂刺違ひの戦闘をやつたのであります、この時には、爆弾、魚雷の命中率は、日本の方が向ふの十倍以上だったのであります、結局向ふの二艘共撃沈してしまつたのであります、これに反して我が軍の方は僅かな損傷を受けただけで、戦闘、航海には差支へないといふ程度ですんだのであります、これが丁度二百哩隔つた海面に於て行はれたのであります、航空母艦の大きさから申しましても、飛行機の數から申しましても、向ふもこつちも殆ど同等であつた

にも拘らず、かういふやうな結果が起つた、これは一に術力の相違であらうと思ふのであります、精神力の方に至りましては、殆ど問題外といつていゝ位、向ふと日本は違つて居るのであります、精神力に非常に優越せる點があるといふことが戦績に現れてをります、これは日本人といふものの國民性が非常に土臺を成して居ることと思ふのであります、兎に角正義の觀念が強くて、そして自ら全軍のために自分を犠牲にするといふ犠牲的精神を持つてをり、敵を撃たずんばやまないといふところの敢闘精神、私を捨て、悠久の大義に生きるといふ崇高なる精神、かういふものの寄り集りが、日本の航空機の使用の上に現れて來るところの非常な美しい點であらうと考へて居るのであります、ハワイの海戦の時に鈴木三守といふ大尉ですが、この人はあそこで戦死したのであります、二階級飛んで中佐になつてをります、その時などは、雷撃を執行致します時に、雷撃の前に敵弾を受けてもう殆どふら／＼になつてしまつたのであります、よく沈著大膽に飛行機を操縦しまして、さうして自分の雷撃點に行つて正確なる魚雷發射をやつて、それが敵艦に命中するのを見て、もうこれまでといふので、敵の艦橋に向つて自爆をして居るのであります、これは又飯田房太といふ大尉ですが、これも中佐になつてをられますが、ホイラーフィールド陸軍飛行場の方をやつつけろといふので、その方に廻されまして、戦闘機隊の指揮官として参りましたが、風下の方からどん／＼やつて参りまして、大體撃破炎上せしめた、その途中で飯田大尉機は敵弾を受けまして片羽根に大きな孔が開きました。發動機から

は火を噴いて、もうこれはいかぬといふので、部下を連れて上空に上りまして、そこで訣別をして、敵の格納庫に向つて急轉直下自爆を遂げた。この人は平生から部下を教へるのに、敵と戦闘してもう發動機なり飛行機が見込みがなくなつたと思つたならば、時を逸せず自爆をしてしまへ、若し一瞬その時機を失ふといふと、自爆の時機を失つて不時著捕虜の悲運にならなければならぬといふことを、常々いうてをられたさうであります。その通りを實行したのであります。それから珊瑚海の海戦にあれ程の大きな戦果を得られました。洵にうるはしい話があります。これは航空兵曹長で名前は一寸忘れましたが、少年航空兵上りで、これは偵察に出て、向ふの航空母艦を見つけて、電報で以て報告をしたのであります。その報告が實に確實な報告でありまして、殊にどつちから攻撃したらよといふやうなことでまで報告して来たさうであります。それでまあ報告を終りまして、自分で隊に歸らうといふので歸還の途についたところが、途中で電報を受けて出發致しました我が攻撃隊の大軍に會ひました。それを見て、自分は艦に歸ることが惜しくなりました。自分は兎に角敵を見て来たのだから自分が案内して行けば都合がよいといふので、燃料がなくなることは分つて居るのに案内を致しまして、攻撃の手引をしたのであります。さうして自分は燃料が盡きて不時着して戦死したのであります。これなどは自分一個といふものを犠牲にして、大なる戦争目的に對して、本當に自分一人を全然捨て、かゝつたといふやうな點が明かに見えて居るのであります。洵に頭が下る次第でありま

す、その後近くはレンネル島沖の海戦に於きましても、指揮官が非常に見事な自爆をやつてをります。これ等は一々拾つて見ればさうでありますけれども、どの人でも恐らくはさうだらうと思ふ、こゝが日本の飛行機乗の精神力の優れた點であります。これはどうしても外の國で真似ることの出来ぬ點ではないかと思ふのであります。

少し餘計なことを附加へましたが、これから今日の制空と決勝といふことに付きまして、卑見を申述べてみたいと思ひます。現今の國家間の戦争といふものは、武力は勿論、經濟、思想、宣傳、謀略凡ゆる手段を盡しまして、所謂總力を以て戦闘が行はれるのであります。これはもう周知のことです。りますが、どういふ手段を用ひましても、兎に角敵を屈服させる、敵國を屈服させるといふことが戦争目的の達成でありまして、屈服させてしまへば、その方が戦捷の榮冠を得る譯であります。これは武力の使用に於きましても、いろ／＼の手段があらうかと思ふのであります。國家といふものは國土の上に成立つて居るのでありますから、敵の首都であるとか、或は重要な産業地であるとかいふやうな所を占領致しまして、敵の國家としての機能を發揮することの出来ぬやうにすれば、戦争目的といふものは達し得られるのであらうかと思ふのであります。一寸御参考に申し上げます。假に大阪を中心と致しまして二千五百哩の半径を以て圓を描きますと、これが丁度日本の今の最前線の戦略要點であるところの昭南、マカッサル、チモール、それからラバウル、ずつと北の方に行きまして、ア

リューシャンの真中にあるアトカ、今のキスカよりも少し東北になつてをります、さういふのが今の二千五百哩の半径で描いた環上にある譯であります、それから今度はハワイの方を中心と致しまして、同じく二千五百哩のラジウスで以て圓を描きますと、それが丁度ソロモンの東の方からフィジー、それからつと東の方に参りまして、フランス領のタヒチ、これがこの環上にある。この二つの環は何處で交はるかといふと、ビスマーク群島の直ぐ東の海面で切り合つて居る、これは何を物語るか、丁度向ふからとこちらからの等距離の點がソロモン群島附近にある、これが今死闘を繰返されて居るところの地點である、これはかうなつて來るのが當り前であると思ふ、どつちからも距離が同じ位、補給の點に於て何等大差がない、アメリカの方は作戦地がアメリカの西海岸にありますから、距離はうんと遠くなつて居るから、アメリカの方が幾らかその點で申すと損なのであります、その他こゝに濠洲といふアメリカの出店みたいなものがあります、それから持つて参りますと、また實際相當やつて居るのであります、本當にこの濠洲がもつと育成されまして立派な策源地になりますと我が方にとつて都合が悪くなるのであります。だんたんと敵の領土を占領致しまして、こちらの戦略基地を進めて行くといふことは、今度の戦争に於て初めて見られるところの現象でありまして、太平洋の真中で大艦隊の決戦といふやうなことは、未だ起つてをりませぬし、又これから先も當分の間はさういふ戦争が見られないといふ風に思はれるのであります、我が日本帝國は世界第一の太平洋と、

世界第一の大陸であるところのアジア、この丁度中間に位して居る要ともなり、軸ともなつて居る状態でありまして、太平洋及びアジアを護り、アジアを成育して行くといふことは、これは日本の天賦の使命であると考えるのであります、ところで太平洋を護るといふことは、即ち太平洋を制壓するといふことであります、太平洋を制壓致してしまへば、もうアジアに對しても非常に安固になりますし、それから又濠洲の方も我が傘下に置くことが出来るのであります、たゞアジアだけを制し得たと致しましても、太平洋の護りが十分でなかつたならば、アジアの護りといふものは不安定なものであらうと思ふのであります、それで只今アメリカの方から日本に對してどういふやうな作戦をやるかといふことを、向ふの人のいうて居ること、或は議論などをして居ることを聴きまして、又雑誌等に出てをりますところの題材をとりまして考へて見ますと、アメリカは日本に對して大艦隊を以て、ハワイ、ミッドウエー、グワム等を経てフィリッピンに至るところの道を死守するのが主なる作戦であるとして、これで進んで行くといふ積りでをつたやうであります、これが開戦劈頭艦隊の大部を失ひまして、かういふことは水泡に歸してしまつたのであります、そこで今日ではどういふ作戦に出るかといふと、一方に於ては大きな艦隊をこの三・四年間の中に建造を致しまして、さうして日本に對して決戦が出来るやうな体制を持つて行くといふことを努めると同時に、先づ目下の急務としては、日本に對して痛撃を加へ得るやうな地點を次々と占領して行くといふことと、それからアラスカを基

地としてアリユーシヤンを経て日本の心臓部を狙ふ、向ふが三・四年後に大艦隊を以て中央航路を正々堂々と進撃するといふのと、只今申しましたアリユーシヤン方面、それから今日戦つて居るところの西南太平洋方面、かういふ風な占領に依つて日本に對して進攻をしようといふ風に考へて居るやうであります、そこでアリユーシヤンの方から参りますものは、御承知のやうに只今は非常に霧が深くなつてをります、冬は冬で非常に天候が悪い、さういふやうな關係で、こちらの方で大きな作戦をやらうとしても、それは無理であります、漸くアツツ島に足をかけても、あれをいよく占領することが出来るまでには何ヶ月かゝるか分らない、そんなことをしてだん／＼近寄つて千島の方でも手をつけるといふことは、これはなか／＼長年月を要すると思はれるのであります、假に一時的の成功を得ましても、日本からは距離も近いし、これが永續することは難しいことと思はれるのであります、それから今申しましたやうに、大艦隊の行動をするに適しないといふ關係から、この方は支作戦に過ぎない、中央の方は只今のところでは出来ませぬし、又日本と同じやうな海上兵力に達し得たとして、その時にこのやうなことをやつたらどうかといふと、これ亦非常に冒險なことでありまして、一戦の後に自分の方の海上兵力が非常な打撃を受けるといふことになりますと、もうそれから再び立つことは出来なくなるのであります、これ亦非常に難しい問題であります、残されたのは濠洲方面であります、これは點々として連續致してをりますニュー・カレドニア、フィジー、サモア、それからイ

ギリスから取りましたカントン、エンタペリト、バルミユラ、ハワイ、かういふ前進基地を傳つて濠洲に達するには、日本からの距離が遠いだけに、比較的安全なる航路でもあります、今日續々として濠洲に増援を送つて居る、この濠洲を大策源地にして、こゝから東印度諸島に次々と基地を奪つて東印度諸島を奪還して、日本に對する資源の根源を斷つて、遠巻に日本を封鎖してしまふといふことが向ふにとりましては上策でないかと思はれるのであります、又さういふ風に今進めつゝあるのではないかと思はれるのであります、ところがこれも濠洲を大策源地にして日本に對するといふことは、今では成程マツク・アーサーがあそこの軍事の權力を握つてをりますし、アメリカの屬國みたいになつて居るのであります、これ亦濠洲の人口、資源、今の工業の發達程度などから考へて見まして、本當にこれを大策源地とするのには相當の年月がかゝるやうに思はれるのであります、日本の方からはそれではどういふ手を打つかといふと、これは私共たゞ想像に過ぎないのであります、アリユーシヤン方面は向ふにとつてもこつちにも同様であります、大きな作戦は出来ませぬ、さればといつて、アメリカを中央からして直接に衝くといふことも、これは今の儘の兵力では無理な問題であらうかと思ふのであります、たゞ濠洲方面に對しては、丁度戰闘機の行動半徑内に次々と島嶼を占領して、これを前進基地として順次に進み得る體形にありますので、日本にとりましては、この方は割りにやり易い、ソロモンは兎に角追拂つてしまつて、假にニュー・カレドニア、ニュー・ヘブライズあ

たりを日本が占領したといふことになり、丁度濠洲とアメリカの間に大きな楔を打込んだ譯になりまして、こゝに米國との間の連絡が非常に困難になつて來ます、濠洲に送り込むところの増強の兵力、資材が十分でなかつたならば、濠洲自身としましてはそれ程の有力なものではないのでありますから、こゝに初めて濠洲に對する作戦が可能になつて來るのではなからうかと思ふのであります、或は今の儘ならば、濠洲の西の方は全く空きでありまして、防備も殆どない、ジャワの方から濠洲に兵を送るのは比較的易しいのであります、しかしこれ亦濠洲の内地の地形の上から致しましてもたゞ西海岸に上つて見たところで、濠洲を制壓するといふことは難しいのであります、どういふ風になりませうか、たゞ米濠間の連絡を斷つといふことに成功しましたならば、後は又その際に於ていろいろな工夫が出ることと考へられるのであります、何れにしても只今申しますやうに、アメリカにとつても日本にとつても、濠洲といふものは、全くこの戦さの天王山、濠洲を取つた方がこの戦さの勝になる、それで以て結末は無論つかぬだらうと思ひますけれども、これを取つた方が十分なる資源を有することにもなり、所謂不敗の態勢を占むることが出來ると思ふのであります、大東亞共榮圏の地域の中に濠洲を含めることは無論必要でありまして、それとインドまで含んだところの大東亞共榮圏といふことになり、もう資源の點に於て南北アメリカを凌ぐやうになります、それが比較的距離の所に集つて居るのでありますから、太平洋を隔て、進攻して來るところの敵に對しましては、戰

略的の態勢は非常にいゝのであります、先づどうしても作戦の軌道といふものは、この方に向けられるのではないかと想像が出來るのであります、これまでの戦争の跡を翻つて見まして、飛行機で以て先づ制空をやるといふことが最も必要なことでありまして、何時でもその手で以て後の作戦が巧く導かれて行つたのであります、これから先も同じであります、兎に角基地を進めますのにしても、制空を第一にしなければならぬのでありますから、こゝに飛行機及び飛行機の搭乗員の非常な増加を要するといふことは申すまでもないことであり、その點に付きまして、アメリカの方が非常に生産力が大きくて、日本と殆ど桁違ひであるといふ風に考へてをられて、それがためにどうも生産の上に於て日本がアメリカに太刀打ちが出來ないのだから、早晩は日本の方が敗けるのぢやなからうかといふ心配を持つてをられる方も相當あるやうに伺つてをりますが、これ亦それ程心配したものでないやうに思はれるのであります、成程アメリカは今では一月に七千臺近く作つてをりますが、アメリカの飛行機といふものは歐洲にも送らなければならぬ、アフリカにも送らなければならぬ、支那も助けてやらなければならぬ、ソグイェトにも送つてやらなければならぬ、かういふことで、こちらの西南太平洋の方に重點を置くに致しましても、この方へ持つて來るところの飛行機といふものは自ら限度がありません、これに對する位の飛行機が日本で出來ない譯はない、又飛行機乗の方であります、これもアメリカでは今大分困つて居るやうであります、成程數の上ではさう困つてをりませぬ、大學の

學生はもう強制的に驅立て、飛行機に適するやつは、悉く航空隊の方に徴兵致しまして、只今その數が十萬人と稱してをります、日本ではまだ徴兵といふ段までは至つてをりませぬが、本年からは大學卒業者の中から、餘程多數の人を航空隊に結びつくやうに仕向けてをられるやうであります。

それで大戦に於ける如何なる戦闘に於ても、その初めに於て制空を得るといふことが極めて必要なことは申すまでもありませんが、これまでの戦果が華々しかつたので、もう飛行機さへ澤山作つて制空権を取つてしまへば、艦隊は要らぬといふやうなことを、極端にいふやうな人が出て來たのであります、これは餘程慎重に考へなくちやならぬことでありまして、例へば今申す飛行機が戦闘艦を直ぐ撃沈してしまふやうでは、戦艦なんか要らぬぢやないかといふやうな説が時々出るのであります、これは現在の状況を見れば、戦艦は飛行機に對しては餘りに脆弱でありまして、二分か三分の後に撃沈されてしまふといふことが現れてをりますけれども、これは永久にさうであるかといふと、なか／＼さうはいへぬだらうと思ふのであります、近頃は超短波の探知機が非常に發達して參りました、高角砲に取りつけたところの、陸軍では測標器と申されてをりますか、海軍の方では電波探診機といつてをります、さういふものが非常に發達して參りますと、高角砲の命中率といふものも躍進的に上つて來るのであります、同時に軍艦の防禦の方に致しまして、必要程度の大きさの軍艦になりますならば、飛行機の一トンや二トンの爆弾を受止めるだけの軍艦は必ず出來ると思ひます、大東亞戦争が始

まつて間もなく亡くなりました平賀帝大總長に、どうだらうか、さういふやうな沈まない艦が出來るだらうかと尋ねますと「それは出來るよ」「一體何萬トン位にしたら出來るですか」「それは計算して見なければ分らぬ」かういふことでありましたが、兎に角平賀總長は、飛行機の攻撃に對して容易に沈まないものが出來ることは確信してをられたやうであります、さういふことを考へて見ますと、艦の構造の上に於て技術的に可能である、容易に沈まない艦が出來るといふことは可能である、それに飛行機の對空攻撃武器の發達に依りまして、今に飛行機がなか／＼容易に軍艦を攻撃出來なくなるといふことも考へられます、又根本的に考へて見ますと、どの國でも海に面して居る國は、勿論海洋を交通線と致さなければ、その國の生存は出來ないのでありまして、太平洋に例を取つて見ますと、この区域内に於きまして、殊に大東亞に於ける日本を中心にして考へて見ますと、これは無數の交通路がある譯でありまして、かういふやうな所の交通運輸の途は海上船舶に依らなければ出來ない、將來もこれの潜水船といふものが出來るかも知れませぬが、これはさう簡單に出來ないものでありますから、永久的に海上は船舶で輸送するといふことが必要でありまして、海上を船舶で輸送する以上はこれを護衛するものが必要であります、軍艦の形式は變つて來るかも知れませぬが、又變るべきものとも思はれますけれども、兎に角軍艦、海上の艦艇といふものが必要であるといふことは、今日以後も變りはありませぬ、それから制空権を得れば、それが即ち制海権を得たことになるのだ、かういふ



風に断定してをられる方もありますけれども、これ亦一寸首肯しがたい點があるのであります。成程飛行機の行動半徑に於きましては、これはもう制空權を得た方が制海權も得られるのであります。制空即制海となるのであります。その距離たるや極めて短いものであります。戦闘機の行動半徑と申しますと、これから發達を見越しましても、概ね一千哩を出でないのであります。假に戦闘機の代りに大型、中型の攻撃機を以て制空權を得られるものと假定致しましても、これとてもこの行動半徑は將來を見越しまして、假に一萬哩の航續距離を持つところの攻撃機が生れて参りましても、その行動半徑は概ね四千哩を出でないのであります。それは天候のことも考へなくちやなりませんし、途中の戦闘といふことも考へなければなりません。餘裕を持たなければならぬといふことで、概ね四千哩を出でないのであります。到底太平洋をカバーすることは出来ないであります。只今のところでは制空をやり得るところの區域といふものは、太平洋の大に較べて見ますと一部分に過ぎない、それだけの制空權を得たからといつて、太平洋全體の制海權が得られるかといふと、それは到底不可能なことであります。

それで先程申しましたやうに、濠洲をこちらの傘下に置きまして、さうして兩方の戰略態勢が同様になつて来たといふ場合には、これはどうして戦争の結末がつくかと申しますと、やはり兩方共資源に物をいはして大艦隊を造つて、太平洋上で飛行機を伴ふところの大艦隊の大決戦が起つて、これに

依つて始めて結末がつくのではないか、それが無い以上は、敵も味方も敵地に侵入して城下の誓をなさしめるといふやうなことは、これは夢のやうなことであります。どうしてもさういふ風に進んで来るのではないかと思ふのであります。そこで艦隊と基地の航空隊、これが兩方に双方相協同致しまして太平洋の制海權を得るといふことになるのであります。よく世間では航空母艦などは、もうほんの僅かの間に撃沈されてしまふのだから、あんなものはしやうがない、基地の航空隊をうんと殖して、さうしてその航續距離を増大して行けばよいぢやないかといふ風にいはれる方もありますけれども、只今のところでは、またこゝ、五年や六年の間ではさういふやうなことが来ることはないやうに思はれるのであります。といふのは、如何に飛行機の航續距離が増大致しましても、飛行機は夜は殆ど働けないのであります。假に四千哩の行動半徑の飛行機が飛出して来て、これを海上に使ふといふことを考へて見ますと、それは四千哩飛ぶだけに十數時間かゝるのであります。朝早く無線に依つて敵艦隊の在處が分つて飛出してしまふと、夜になつてしまふと、夜になつてしまふと、しやうがないです。から、随つて四千哩の行動半徑といふものは短縮する譯であります。又制空權を得るための戦闘に於きましては勿論のこと、戦闘機を伴つてをらなければならぬのであります。から、戦闘機の航續距離といふものは、又大きな關係を持つ譯であります。それから考へますと、如何に飛行機の航續力が増しましたも、飛行機のみを以て制空、制海の兩權を我が手に握るといふことは不可能であらうと思

つてをります、只今申し上げましたことの結論として申しますと、制空のみでは太平洋全體の制海は得られない、随つて航空母艦が如何に脆弱であつても、航空母艦の建造を怠るやうなことがあつてはならない、海上の艦艇といふものも永久に必要なものであるから、海軍としては海上艦艇は捨てる譯に行かない、しかし戦捷を得る端緒と致しまして、制空といふことは一番大切なことであるから、明年あたりは何がなんでも飛行機の増強をやつて、少くとも大東亞の區域に於きましては、敵を壓倒し得るところの空軍力を持たなければならぬと思ふのであります、洵に難多な話でありましたが、實は私の極く近親の者が戦死致しましたので、昨晚も睡眠不足でありまして、頭が少しこんがらがつて、甚だ粗雑なお話を申し上げまして失禮致しました。(拍手)

## 本 會 報 告

### 社 團 法 人 大 日 本 國 防 義 會 會 長 就 任 の 辭

陸軍大將 尾 野 實 信

今回不圖も推されて本會會長に就任致しましたが老生能く其任に堪ふるや否心配であります乍併一旦

御引受したる以上は爲國家聊なりとも御役に立たねばなりませんから何卒會員諸君に於かせられても御腹藏なき注意を與へらると同時に力強き御後援を御願致す次第であります

申迄もなく本會は創立後既に三十有餘年の立派なる歴史と傳統を有し遠く日露戦役後戦勝に心ゆるみ國民ともすれば優柔不斷に流れ安逸を貪らむとする世風を憂ひ當時憂國の士が治に居て亂を忘れざる士氣作興の爲め夙に國民一般に廣義國防の重要性を説き陸海軍指導の下に其思想の普及に盡力し來りたる關係上自然本會の運行は民間殊に經濟人が主體となり今日に至つた次第でありまして歴代の會長に見るも中野武管氏、澁澤子爵、柳澤伯爵、山田英太郎氏等の如き其間の消息を知ることが出来るのであります

然るに今回軍人の老生が會長に推されました事は何か之に理由がなければならぬのであります思ふに決戦態勢下の今日本會も亦決戦態勢に順應すべく從來の型を破りて軍人會長の必要を感せられたる爲めではあるまいか果して然らば新會長の責務又重しと言はねばなりません

這回會長就任に際し第一著に考へました事は本會の使命も行動も和平時代より戦争時代、戦争時代中にも緒戦時代決戦時代と時局の進展に伴ひ變化轉進せねばならないと思ふ即ち間接より直接へ理論より實行へと進展すべきである

今や我國は盟邦と共に總力を擧げて米英撃滅の決戦態勢下にあり全國民は前線將兵に劣らじと全能力

を集中し重要産業の擴大、食糧の増産を計り以て戦力強化に邁進しつゝあり幸にして國民の熱烈なる協力の下に相當の成果を收め得つゝある事は誠に意を強うするに足るのであります併し茲に老生が一つ大に心配して居る事は兵器其他の新發明である由來我國は先進歐米の發明發見に依存せし關係上交戦後の彼我の新發明新發見の狀況程度如何である我にして彼に先んずればよし不幸彼に先んせられんか時局下否決戦下之は由々敷大事と思考す此觀點よりして新發明新發見への熱中獎勵鞭撻は急務中の急務であつて目下政府が全力を傾けつゝある重要産業の擴大強化及食糧の増産と共に最必要不可缺の問題で我國軍官民の共に重大關心を持つべきものであり特に一般國民が熱中すべき緊要事であると確信するものであります

かるが故に我大日本國防義會は目下國家の最も緊要事たる此の新發明新發見の獎勵増進を旗印として廣く一般國民に呼び掛け殊に市井に隠れ埋れ捨てられたる逸材遺材を世に出し其驥足を伸ばさしめ以て國家の急場に役立たせ仇敵米英に先んじて戦局の先制決定に寄與する事を得ば本會の面目は申迄もなく皇國日本の聖戦に貢獻するところ蓋し大なるものあらむと信するものであります。其實行運營の方法は本會の各機關に諮り不日發表することゝせん右所懐の一端を述べ新任の御挨拶と致す次第であります。

以上

○理事會（常任理事會をも含む）

昭和十八年六月四日、同十日、同二十一日、七月五日、九月三日、同十日、同二十日、同二十二日  
本會事務所にて開會、通常會務及事業發展計劃問題等に就き協議を行へり。

○講演會

昭和十八年五月二十二日 制空と決勝 海軍中將 安東昌喬閣下  
同 年六月 四日 南方航空路 海軍少將 松永壽雄閣下  
同 年七月 五日 決戦下の食糧増産特 大井上理農學研究所長 大井上康君  
に榮養週期説に就て  
右は何れも當日永樂俱樂部講堂にて開催時局下大に有益なる講演なりしを以て來會者毎回無慮百五十乃至二百名に達し頗る盛會なりき。

○理事増員

大政翼賛會調查局長 鹿島守之助君（新評議員）  
日本鑿泉株式會社 取締役 宇田惣吉君  
北滿産業株式會社 取締役 山形章君  
帝國大學教授經濟學博士 荒木光太郎君（新評議員）  
早稻田大學教授商學博士 末高信君

○幹事更迭

幹事福田辨治郎君病氣に依り退職、後任として蒲原俊麿君就職せり。

○參與増員

福田辨治郎君

社団法人 大日本國防義會定款

(大正十三年八月十三日法人設立認可)

第一章 總 則

- 第一條 本會ハ國防ニ關スル諸般ノ事項ヲ調査研究シ其智識思 第五條 本會々員ヲ分テ通常會員特別會員及名譽會員ノ三種トシ左ノ區別ニ從テ
- 第二條 本會ハ社團法人大日本國防義會ト稱ス
- 第三條 本會ハ事務所ヲ東京都麹町區大手町二丁目二番地ニ置キ支部又ハ出張所ヲ必要ノ地方ニ設テ
- 第四條 本會ハ前條ノ目的ヲ達成スルタメ左ノ事業ヲ行フ
  - 一、講演會、討論會ヲ開クコト
  - 二、調査部、研究部其他必要ナル機關ヲ設クルコト
  - 三、關係當局ニ建議スルコト
  - 四、會報若ハ圖書ヲ刊行頒布スルコト
  - 五、前各條ノ外本會ノ目的ヲ達成スル爲必要ナル事業

第二章 會 員

- 第六條 本會々員タルラントスルモノハ會員二名以上ノ紹介ニ依リ
- 一、通常會員ハ本會ノ維持ニ任シ毎年金六圓以上又ハ一時金百圓以上ヲ贈出スルモノ
- 二、特別會員ハ本會ニ特別關係アルモノ又ハ本會ノ事業ヲ補助スルモノニシテ理事會ノ決議ヲ以テ推薦スルモノ
- 三、名譽會員ハ本會ノ趣旨ヲ贊成スルモノニシテ其地位聲望本會ヲ裨益スヘシト認ムルモノ及本會ニ特別ノ功勞アルモノニ就キ評議員會ノ決議ヲ以テ推薦スルモノ

- 第七條 本會ヲ退會セントスルモノハ書面ヲ以テ其旨届出ツヘシ但既納ノ會費ハ之ヲ返還セズ
- 第八條 本會々員ニシテ左記各條ノ一ニ該當スルモノハ評議員會ノ決議ヲ以テ之ヲ除名スルコトアルヘシ
  - 一、本會ノ名譽ヲ毀損シ若ハ本會ニ對シ不利益ナル行爲アリト認メタルトキ
  - 二、本會ノ定款其他ノ會則ニ違背セル行爲アリタル時
- 第九條 會費ノ定納六箇月以上ニ及フモノハ前條ノ規定ニ拘ラズ直ニ會員タルノ資格ヲ喪失スルモノトス

第三章 役員及職員

- 第十條 本會ニ左ノ役員ヲ置ク
  - 一、會長 一名
  - 二、理事 三十名以内
  - 三、監事 五名以内
  - 四、評議員 若干名
- 第十一條 會長ハ理事中ヨリ理事及監事ハ評議員中ヨリ各互選ヲ以テ之ヲ選舉シ評議員ハ會員總會ニ於テ會員中ヨリ之ヲ選舉ス
- 第十二條 役員ノ任期ハ三年トス但重任ヲ妨ケス

- 第十三條 結前ニ滿了スルトキハ其定時會員總會ノ終結ニ至ル迄之ヲ延長ス
- 第十四條 役員ニ缺員ヲ生シタルトキハ特ニ補缺ノ必要ナキ限り次ノ改選期迄之ヲ延長スルコトヲ得
- 第十五條 補缺員ノ任期ハ其前任者ノ殘任期間トス
- 第十六條 會長ハ本會ヲ代表シテ會務一切ヲ統理シ會員總會評議員會及理事會ヲ招集シ各其議長ニ任ス但會長事故アルトキハ理事會之ヲ代理ス
- 第十七條 理事ハ會務ヲ掌理ス會長ハ理事會中ニ就キ常任理事若干名ヲ指名ス
- 第十八條 監事ハ本會會計及會務ヲ監査ス
- 第十九條 評議員會ハ評議員ヲ以テ之ヲ組織シ會長ノ諮問ニ應ジ會員總會ニ附議スヘキ事項其他重要事項ヲ決議ス
- 第二十條 評議員會ハ會長ニ於テ必要ト認メタルトキ若ハ評議員十分ノ一以上ノ請求アルトキ之ヲ招集ス
- 第二十一條 評議員會ハ評議員總數ノ十分ノ二以上出席スルニアラサレハ議事ヲ開クコトヲ得ス評議員會ノ議事ハ出席員ノ過半数ヲ以テ之ヲ決ス可否同數ナルトキハ議長ノ決スル所ニ依ル但總會ニ提出スヘキ定款變更案ノ決議ハ出席員ノ三分ノ二以上ノ同意アルニアラサレハ之ヲ爲スコトヲ得ス

- 第二十二條 會長ハ理事會ノ決議ニヨリ名譽顧問及相談役ヲ推薦シ又ハ參與委員ヲ囑託スルコトヲ得

名譽顧問及相談役(會務ノ執行ニ關シ會長ニ對シ意見ヲ述ヘ又ハ理事會ニ出席スルコトヲ得)

第十六條 本會ニ左ノ職員ヲ置キ會長之ヲ任免ス

一、幹事 若干名

一、書記 若干名

第十七條 幹事ハ會長及常任理事ノ命ヲ受ケ會務ヲ處理シ書記ハ幹事ノ指揮ニ從ヒ會務ニ服ス

第四章 會員總會

第十八條 定時會員總會ハ毎年一回之ヲ東京都ニ招集シ事務及會計ノ報告ヲ爲シ及重要ナル事項ヲ決議ス

臨時會員總會ハ會長ニ於テ必要ト認メタル場合及會員三分ノ一以上ノ請求アリタル場合ニ之ヲ招集ス

第十九條 會員總會ハ少クとも開會五日前ニ附議事項及日時場所ヲ具シタル通知狀ヲ發シテ之ヲ招集スヘシ

第二十條 總會ノ議事ハ出席會員ノ過半數ヲ以テ之ヲ決ス可否同數ナルトキハ議長ノ決スル所ニ依ル但定款變更ノ決議ハ出席會員ノ三分ノ二以上ノ同意アルニアラサレハ之ヲ爲スコトヲ得ス

第五章 資 産

第二十一條 本會ノ資産ハ基本金、會員ノ贈出金、寄附金及其他ノ

第二十二條 收入ヨリ成立ス 本會ノ基本金ハ指定寄附金又ハ理事ノ決議ヲ以テ之ヲ定ム但設立當初ニ於テハ大日本國防義會ヨリ繼承シタル資産ノ内金壹萬圓ヲ下ラサル金額ヲ定メテ基本金トナス

第二十三條 本社團資産ノ管理使用及處分ハ設立者及理事ノ決議ニ據ル

第二十四條 本社團解散ノ場合アル時ハ本會ノ資産ハ主務官廳ノ許可ヲ得テ設立者及理事ノ決議ヲ以テ之ヲ處分ス

第二十五條 本會ノ經費ハ堂本金ノ利子、會員ノ贈出金、寄附金其他ノ收入ヲ以テ之ニ充ツ

第二十六條 本會ノ會計年度ハ毎年一月一日ニ始マリ十二月三十一日ニ終ル

第二十七條 大日本國防義會規約ニ據ル會員及名譽顧問ハ本定款ニヨル會員及名譽顧問トス

第二十八條 本社團設立ノ際ニ於ケル會長ハ大日本國防義會現任會長ニ當ル

第二十九條 大日本國防義會ノ資産ハ本社團ニ繼承スルモノトス

第三十條 本會事務施行ノ爲必要ナル細則ハ別ニ之ヲ定ム

附 則

名譽顧問

名譽顧問  
關田啓介 有馬良輔 男爵 荒木貞夫 評議員  
松井石根 阿部信行 堀啓次郎  
南條金雄 山田英太郎

役 員

會長 尾野實信 八角三郎 吉田秀人  
常任理事 長谷川直敏 山形章

理事 尾野實信 長谷川直敏 八角三郎  
吉田秀人 淡中孝八郎 中野金次郎  
相馬半治 岩崎清七 渡邊金三  
宮原國雄 鈴木忠治 新井章治  
神林虎雄 松本新太 近藤利兵衛  
穴水熊雄 北川與平 白石勝彦  
宮治民三郎 尾崎三雄 匝原胤次  
高木義賢 増田義一 山田俊夫  
鹿島守之助 宇田惣吉 山形章  
荒木光太郎 末高信

監 事 寬正太郎 村上濱吉

子爵 岩崎清七 石本祥吉 井上源之丞  
原嘉道 橋本圭三郎 箱石朝政  
長谷川直敏 服部寅雄 馬場鎮江  
西野元 東郷昌武 尾野實信  
子爵 大河内正敏 大倉和親 侯爵 大隈信常  
大林義雄 男爵 大藏公望 大橋新太郎  
荻野貴右 尾崎誠一 小野寺文哉  
岡村正善 渡邊金三 大森義一  
渡邊三郎 川崎八右衛門 渡邊省二  
波邊善十郎 寬正太郎 神林虎雄  
伯爵 樺山愛輔 鹿取龍造 加藤録五郎  
川原林順治郎 鹿島守之助 金森清之助  
加野吉次郎 吉岡幸雄 吉田秀人  
米山梅吉 田中穂積 淡中孝八郎  
高木陸郎 田中重衛 田中重衛  
高廣三郎 高木謙吉 田中重衛  
高橋謙三 高木義賢 田中重衛  
子爵 會我祐邦 相馬半治 田中重衛  
筑紫熊七 鶴田久作 田中重衛  
土屋半治 內藤久寬 堤康次郎  
中野茂一郎 南郷次郎 中野金次郎  
成瀬達 中村房次郎 中城虎意



昭和十八年十二月十五日印刷  
昭和十八年十二月二十日發行

編輯兼 發行所 橫濱市小港町三丁目百三十八番地  
 蒲原俊麿  
 印刷人 東京都京橋區越前堀二丁目廿四番地  
 渡邊一平  
 印刷所 東京都京橋區越前堀二丁目廿四番地  
 玉友社印刷所  
 發行所 東京都麹町區大手町二丁目二番地  
 計開 大日本國防義會  
 法人 電話九ノ内(四)六六〇一番

- |         |         |        |      |       |       |
|---------|---------|--------|------|-------|-------|
| 村上海清助   | 伯爵 上杉憲章 | 上田恭輔   | 森傳   | 百瀬唯一  | 關谷和三郎 |
| 野間省一    | 宇田惣吉    | 宇佐美辰五郎 | 鈴木忠治 | 末高信   |       |
| 山田英太郎   | 久原房之助   | 黑田善太郎  | 參與委員 | 遠藤高之丞 | 福田辨治郎 |
| 八角三郎    | 山下龜三郎   | 矢野恒太   | 幹事   |       |       |
| 山下恒雄    | 山田俊夫    | 山形章    |      |       |       |
| 山中安吉    | 山口龜藏    | 山田三郎太  |      |       |       |
| 伯爵 松平頼壽 | 增島六一郎   | 增田義一   |      |       |       |
| 松本新太    | 牧野元次郎   | 松田茂幸   |      |       |       |
| 藤田益弘    | 前橋俊一    | 增田正雄   |      |       |       |
| 公爵 近衛文麿 | 編田辨治郎   | 藤野健造   |      |       |       |
| 近藤利兵衛   | 小池厚之助   | 近藤乾郎   |      |       |       |
| 手塚弘平    | 小林又七    | 遠藤高之丞  |      |       |       |
| 荒木十畝    | 青樹重康    | 新井章治   |      |       |       |
| 新井壽策    | 穴水熊雄    | 穴水嘉三郎  |      |       |       |
| 崎山刀太郎   | 荒木光太郎   | 齋藤隆夫   |      |       |       |
| 先光孝     | 佐久間長吉郎  | 佐久間石松  |      |       |       |
| 宮原國雄    | 北川與平    | 木本燧雄   |      |       |       |
| 白石元治郎   | 宮治民三郎   | 三橋金太郎  |      |       |       |
| 白石鹿次郎   | 島津忠重    | 清水釘吉   |      |       |       |
| 白石勝彦    | 四王天延孝   | 芝原寅之祐  |      |       |       |
| 日向源之助   | 白川順一    | 平山午介   |      |       |       |
| 平野登美夫   | 平田讓衛    | 東清重    |      |       |       |
|         | 森盛一郎    | 森山慶三郎  |      |       |       |

終

(東京五二二)